

韓国における日本大衆文化の調査研究(10)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬居, 政幸, 李, 明熙, 夫, 伯, 関根, 英行, 宋, 在鴻, 山田, 知佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005659

韓国における日本大衆文化の調査研究（10）

Researches on Japanese Mass Culture in Korea (10)

馬居政幸 李 明熙 夫 伯 関根英行 宋 在鴻 山田知佳
Masayuki UMAI, Myunghee LEE, Baek POE,
Hideyuki SEKINE, and, Jaehong SONG Chika Yamada

（平成22年10月6日受理）

1. 10年間の韓国中高生への継続調査から得た韓日相互理解教育の課題

我々は1995年度から3期10年間にわたり、文部科学省（文部省）の科学研究費補助金（代表馬居）を得て、次の3種の作業仮定のもとで、韓国青少年の日本と日本文化への接触状況や評価に関する調査研究を実施し、分析結果を発表してきた。¹⁾

- (1) マンガやアニメを代表とする日本の青少年文化を韓国と日本の青少年がリアルタイムで共有することによって、過去の歴史に起因する相克を超える「공감대（共感帯）」と「교감대（交感帯）」が両国青少年の間に形成される。
- (2) 韓国青少年が日本文化を求める背景には、日本と同様に、情報のグローバル化や消費社会化の進行、あるいは少子高齢・人口減少社会への移行など、工業化から情報化の段階に入った社会で育つ人たちが被る生活構造の変化が存在し、その結果、これらの変化がもたらす問題の共有化もまた日韓両国の青少年の間に進行している。
- (3) このように変化する現代社会が生み出す文化と問題を共有する日韓両国青少年にとって重要なのは、過去の歴史ではなく、現在と未来の課題である。

そして、10年にわたった本調査研究の総括として、上記三種の作業仮説を具体化する実践方法を求めて、韓日両国の相互理解教育推進のための課題を次の三点に要約した。²⁾

- (1) インターネットを代表に、IT化の進行で生じる問題の実証研究と相互理解促進のためのメディアリテラシーの育成や情報サイトの増設が急務である。
- (2) 文化のグローバル化に伴って生じる相互の認識と評価の差異（誤解）に関する実証研究を促進するとともに、両国の文化を相互に共有するための機会を拡大する施策が必要である。
- (3) 世代間や二国間の対立を越えるアジア的シチズンシップともいえるべき共有可能な価値と行動様式の構築への挑戦と、そのための課題を解決する過程を共有する機会の制度化が必要である。

だが本調査が終了する2005年に急激に高まった日本批判のなかで、我々は調査結果を見直さざるをえなくなり、韓国における日本批判の再生産過程の特徴を次のように再定義した。³⁾

- (1) 日本との関係の深まりとは別次元で、韓国の人と社会の日本への意識は、「肯定」と「否定」と「どちらでもない」(中間派)の3種の層が拮抗状態にある。さらにこのことは、韓国人が3種に分かれるというよりも、一人ひとりのなかに3種の層が潜在するとみなすべきである。
- (2) その結果、日本との関係がよい時は日本肯定意識、悪化すれば日本否定意識が顕在化する。特に、領土や歴史問題など韓国のアイデンティティに根ざす問題が生じたときは、中間派が批判派に加わり、日本批判の意識と行動が多数派になる。
- (3) この傾向を調査開始時の90年代よりも激しいものとして増幅させ、韓日相互理解を阻む新たな壁になる可能性を持った社会装置が、IMF危機以降、急激に普及したインターネットである。

この再定義の作業過程において我々が重視したのは現在と未来である。

過去を対立する立場で経験した両国の既存世代にとっては、歴史認識の問題は避けて通れない課題である。しかし、敗戦と解放の時から60年以上を経て、互いを対等視する韓国人と日本人が育っている事実を重視しなければならないと考える。その理由を二点指摘したい。

第一は、東アジアという舞台において生じる大競争時代を、互いにライバルとして競い合う男女として生きていかなければならない世代である。

第二は、出生率低下と高齢化率上昇を代表に、急激な工業化と情報化に伴う社会システムの変動がもたらす新たな問題の解決を、互いの国の境を越えて共に担わなければならない世代である。

ライバルである一方で、支え合うことも求められる日韓両国青少年が共有すべき今と未来の問題と課題は何か。我々はその答えを、韓国中高生の意識と行動の内在的な理解から得るために、新たな調査に挑んだ。

2. 多変量解析による韓国中高生の規範意識の把握

我々は科学研究費補助金による調査研究の最終年度(04年)に、10年継続調査に加えて、日本の中高生との比較によって韓国中高生の規範意識の構造や行動類型を明らかにするために、新たな調査を実施した。この新調査は、2000年に馬居が静岡県教育委員会の依頼で実施した中高生の規範意識の特徴を解明する調査との比較を前提に調査票を設計した。それは、①規範意識に関する18種の対比較36設問の調査結果に対して、②多変量解析(SPSS等質性分析:多重コレスポネンス分析)を行い、③規範意識を枠づける2種の軸を析出し、④その軸を基準に調査対象者を複数のグループ(クラスタ)に分類(クラスタ分析+判別分析)して、それぞれの特徴を読み取る調査・統計方法である。⁴⁾

我々はこの調査と統計の方法を韓国中高生に適用するために、調査実施に先立って、調査対象になるソウル市、大田市、釜山市に在住する中高生を対象に聞き取り調査を行った。日本の中高生の日常行動や規範意識を前提に考案した質問項目のなかで、韓国中高生の行動や意識にあてはまらない内容を見出し、修正を施すためである。このような修正作業を経て作成した調査票により、2004年12月に調査を実施し、ソウル市、大田市、釜山市の中高生2305名の回答を得た。⁵⁾

なお韓国中高生の規範意識の分析の基本となる対比較の設問は、次に示す①から⑱の問い

とそれぞれの二つの選択肢から構成される。⁶⁾

調査結果の分析では、まず、この18種36質問の回答結果から韓国中高生の規範意識の構造を見出すために、上記多変量解析により2種の軸を析出した。次に、軸の特徴を読み取るために、軸析出のための数量化によって与えられた得点に従って36設問を並べたのが図1 (I軸) と図2 (II軸) である。なお、日韓の中高生の相違点を考察する手掛かりとして、2000年静岡調査と質問が違う項目に◇、位置が違う項目に◆を得点順位の欄に付記しておく。

II軸得点順位	質問	選択肢	II軸
1	16-② 道で近所の人を見かけたときの対応	あいさつをしないことが多い	1.127
2	17-② 電車でお年寄りに席を譲るかの意向	そのまま座っている	0.892
3	8-① 夜遅く、友達から誘いの電話がきたときの対応	断る	0.763
4	4-① 友達がいじめにあっていいるときの対応	自分までいじめられるのはいやだから、友達とのつきあいをやめる	0.762
5	5-② 友達だけテストで100点を取ったときの心境	負けてしまつてくやしいと思う	0.712
6	7-① 授業中、友達が話しかけてきたときの対応	「授業中だよ」と注意する	0.676
7	6-① 友達に短所を指摘されたときの心境	「言われなくてもわかっている」と思う	0.622
8	9-② 友達が盗んだ物を、もらったときの対応	絶対に使わない	0.572
9	3-② 一緒に通学する友達とけんかしたときの対応	友達に謝ってくるまで一緒に行かない	0.407
◇10	10-② 映画館の切符売り場で友達が割り込んだとき	自分はいらない	0.394
◇11	11-② 授業をさぼろうと友達から誘われたときの対応	断る	0.331
12	15-② 両親が風邪をひいて寝込んだときの夕飯状況	コンビニや店で弁当を買って食べるか、出前を頼む	0.330
◆13	14-① 『男は絶対に泣いてはいけない、女はやさしくなければいけな	当然だと思う	0.261
◆14	2-① 普段、学校がある日のしたく状況	前の日に学校のしたくをする	0.092
15	12-① 買ったばかりの参考書をなくしたときの対応	もう一度同じ参考書を買う	0.085
16	18-② 映画鑑賞中に携帯電話がかかってきたときの対応	電話にでない	0.058
◆17	1-② 普段、学校がある日の起床状況	誰かに起こしてもらうことが多い	0.048
18	13-② 捨て犬を見つけたときの対応	そのまま放っておく	0.013
19	13-① 捨て犬を見つけたときの対応	とりあえず、飼い主が見つかるまで自分が世話をする	-0.029
20	12-② 買ったばかりの参考書をなくしたときの対応	最後まで探す	-0.042
◆21	14-② 『男は絶対に泣いてはいけない、女はやさしくなければいけな	当然とは思わない	-0.044
◆22	2-② 普段、学校がある日のしたく状況	その日の朝に学校のしたくをする	-0.067
◆23	1-① 普段、学校がある日の起床状況	自分で起きようとしている	-0.074
24	18-① 映画鑑賞中に携帯電話がかかってきたときの対応	電話にでる	-0.144
25	16-① 道で近所の人を見かけたときの対応	あいさつをすることが多い	-0.155
26	3-① 一緒に通学する友達とけんかしたときの対応	自分から謝って一緒に学校へ行く	-0.181
27	15-① 両親が風邪をひいて寝込んだときの夕飯状況	自分で作って食べる	-0.184
28	17-① 電車でお年寄りに席を譲るかの意向	お年寄りに席を譲る	-0.194
29	6-② 友達に短所を指摘されたときの心境	素直に「直そう」と思う	-0.201
30	4-② 友達がいじめにあっていいるときの対応	自分までいじめられても、友達の意味方になる	-0.208
31	5-① 友達だけテストで100点を取ったときの心境	頑張っているんだなと感心する	-0.249
32	9-① 友達が盗んだ物を、もらったときの対応	そのまま使う	-0.254
33	7-② 授業中、友達が話しかけてきたときの対応	一緒に話をする	-0.255
◇34	10-① 映画館の切符売り場で友達が割り込んだとき	一緒に割り込む	-0.294
35	8-② 夜遅く、友達から誘いの電話がきたときの対応	友達に会いに行く	-0.315
◇36	11-① 授業をさぼろうと友達から誘われたときの対応	一緒にさぼる	-0.453

図1 I軸を構成する36設問の得点表

I軸得点順位	質問	選択肢	I軸
36	9-② 友達が盗んだ物を、もらったときの対応	絶対に使わない	-0.745
35	7-① 授業中、友達が話しかけてきたときの対応	「授業中だよ」と注意する	-0.642
◇34	10-② 映画館の切符売り場で友達が割り込んだとき	自分はいらない	-0.629
◇33	11-② 授業をさぼろうと友達から誘われたときの対応	断る	-0.416
32	2-① 普段、学校がある日のしたく状況	前の日に学校のしたくをする	-0.377
31	8-① 夜遅く、友達から誘いの電話がきたときの対応	断る	-0.298
30	13-① 捨て犬を見つけたときの対応	とりあえず、飼い主が見つかるまで自分が世話をする	-0.277
29	15-① 両親が風邪をひいて寝込んだときの夕飯状況	自分で作って食べる	-0.247
28	6-② 友達に短所を指摘されたときの心境	素直に「直そう」と思う	-0.208
◆27	5-① 友達だけテストで100点を取ったときの心境	頑張っているんだなと感心する	-0.207
26	3-① 一緒に通学する友達とけんかしたときの対応	自分から謝って一緒に学校へ行く	-0.205
25	1-① 普段、学校がある日の起床状況	自分で起きようとしている	-0.187
24	18-② 映画鑑賞中に携帯電話がかかってきたときの対応	電話にでない	-0.189
23	17-① 電車でお年寄りに席を譲るかの意向	お年寄りに席を譲る	-0.183
22	4-② 友達がいじめにあっていいるときの対応	自分までいじめられても、友達の意味方になる	-0.142
21	12-② 買ったばかりの参考書をなくしたときの対応	最後まで探す	-0.124
20	16-① 道で近所の人を見かけたときの対応	あいさつをすることが多い	-0.122
19	14-② 『男は絶対に泣いてはいけない、女はやさしくなければいけな	当然だとは思わない	-0.091
18	13-② 捨て犬を見つけたときの対応	そのまま放っておく	0.108
17	8-② 夜遅く、友達から誘いの電話がきたときの対応	友達に会いに行く	0.122
16	1-② 普段、学校がある日の起床状況	誰かに起こしてもらうことが多い	0.149
15	14-① 『男は絶対に泣いてはいけない、女はやさしくなければいけな	当然だと思う	0.183
14	12-① 買ったばかりの参考書をなくしたときの対応	もう一度同じ参考書を買う	0.238
13	7-② 授業中、友達が話しかけてきたときの対応	一緒に話をする	0.244
12	2-② 普段、学校がある日のしたく状況	その日の朝に学校のしたくをする	0.255
11	9-① 友達が盗んだ物を、もらったときの対応	そのまま使う	0.334
10	15-② 両親が風邪をひいて寝込んだときの夕飯状況	コンビニや店で弁当を買って食べるか、出前を頼む	0.436
9	3-② 一緒に通学する友達とけんかしたときの対応	友達に謝ってくるまで一緒に行かない	0.445
◇8	10-① 映画館の切符売り場で友達が割り込んだとき	一緒に割り込む	0.479
7	18-① 映画鑑賞中に携帯電話がかかってきたときの対応	電話にでる	0.503
6	4-① 友達がいじめにあっていいるときの対応	自分までいじめられるのはいやだから、友達とのつきあいをやめる	0.533
◇5	11-① 授業をさぼろうと友達から誘われたときの対応	一緒にさぼる	0.575
◆4	5-② 友達だけテストで100点を取ったときの心境	負けてしまつてくやしいと思う	0.604
3	6-① 友達に短所を指摘されたときの心境	「言われなくてもわかっている」と思う	0.643
2	17-② 電車でお年寄りに席を譲るかの意向	そのまま座っている	0.845
1	16-② 道で近所の人を見かけたときの対応	あいさつをしないことが多い	0.871

図2 II軸を構成する36設問の得点表

質問：あなたは、もし次のような場面に出会った時どうしますか。それぞれ近いほうの番号に○をつけてください。

- ①普段、学校がある日、あなたは
 1. 自分で起きるようにしている 2. 誰かに起こしてもらうことが多い
- ②普段、学校がある日、あなたは
 1. 前に日に学校のしたくをする 2. その日の朝に学校のしたくをする
- ③いつも一緒に学校に通っている友だちとけんかをしました。あなたは、
 1. 自分から謝って一緒に学校へ行く 2. 友だちが謝ってくるまで一緒に行かない
- ④友だちがいじめにあっていてることを知りました。あなたは、
 1. 自分までいじめられるのはいやだから、友だちとのつきあいをやめる
 2. 自分までいじめられても、友だちの味方になる
- ⑤友だちがテストで100点を取りましたが、あなたは取れませんでした。その時あなたは、
 1. 頑張っているんだなと感心する 2. 負けてしまつてくやしいと思う
- ⑥友だちにあなたの短所を指摘されました。その時あなたは、
 1. 「言われなくてもわかっている」と思う 2. 素直に「直そう」と思う
- ⑦授業中、友だちが話しかけてきました。その時あなたは、
 1. 「授業中だよ」と注意する 2. 一緒に話をする
- ⑧夜遅く、友だちから「どうしても会いたい」と電話がありました。あなたは、
 1. 断る 2. 友だちに会いに行く
- ⑨友だちからもらったボールペンが商店からこっそり盗んだものだということが分かりました。あなたは、
 1. そのまま使う 2. 絶対に使わない
- ⑩映画館の切符売り場で友だちが割り込んだとき、あなたは、
 1. 一緒に割り込む 2. 自分はしない
- ⑪補充授業や塾の授業をさぼろうと友だちに誘われたとき、あなたは、
 1. 一緒にさぼる 2. 断る
- ⑫買ってあまり時間のたっていない参考書をなくしてしまいました。あなたは、
 1. もう一度同じ参考書を買う 2. 最後まで探す
- ⑬捨て犬を見つけました。あなたは、
 1. とりあえず、飼い主が見つかるまで自分が世話をする 2. そのまま放っておく
- ⑭『男は絶対に泣いてはいけない、女はやさしくなければならない』という考え方があります。あなたは、
 1. 当然だと思う 2. 当然だとは思わない
- ⑮両親が風邪をひいて、寝込んでいます。あなたは夕飯をどうしますか。
 1. 自分で作って食べる 2. 店で弁当を買って食べる
- ⑯道で近所の人を見かけました。あなたは、
 1. あいさつをすることが多い 2. あいさつをしないことが多い
- ⑰電車で疲れて席に座っていると、お年寄りが乗ってきました。あなたは、
 1. お年寄りに席を譲る 2. そのまま座っている
- ⑱映画館で映画を観ていたところ、携帯電話がかかってきました。あなたは、
 1. 電話にでる 2. 電話にでない (※持っていない人も持っていると考えて答えて下さい)

さらに、析出された2つの軸で二次元グラフを作成し、その平面上に36設問に与えられた得点をプロットした散布図を作成する(図3)。この図上に数量化で得られた調査対象者(2305名)得点、すなわち36設問の数量化と同様に、2305サンプルそれぞれによる各設問の回答への数量化で与えられたI軸上とII軸上の位置(得点)を確認する。そしてその回答傾向(分散状況)の類似性によって、調査対象者のグループ分け(クラスタ分析)を行う。この分析では、いくつかの固まり(クラスタ)にするかは分析者の観点によって決定する。そのため、我々は図4に示すように、最小クラスタが100人以上になる9クラスタを選択した。図4には、クラスタの属性上の特徴を読み取るために、それぞれに所属する中高生の人数を男女別に析出した。

このようなコンピュータによる作業を終えあと、我々は次の2種の読み取り作業に入った。

①図1と図2から1軸とII軸の特徴を読み取る

②他の調査項目とのクロス集計結果から、9種のクラスタ(類型)の特徴を読み取る

我々はこの二つの作業を、韓国に先立って実施した静岡県での中高生調査の分析をモデルにして行った。既に経験ある作業であり、データのにも両国の中高生の大きな差はないと判断したため、分析は順調に進行するかに思えた。だが、最終段階で根本的な問題に直面した。データに基づき解釈した韓国中高生の特徴が、実際の韓国中高生とずれていないかどうかを検証する基準が不明確なことに気付いたからである。

調査対象は韓国中高生だが、調査結果の解釈モデルが日本の中高生であり、解釈者が日本人であれば、韓国人の解釈とは異なるバイアスが入り込むことを避けえない。解釈者が韓国人であっても、年長の研究者が中高生の調査結果を解釈する場合、同様の問題が生じる。このようなバイアスを最小限にするためには、調査者と調査対象者の文化的差異を顕在化させる作業(調査)が必要になる。我々はこの問題を韓日相互理解の課題を開示する機会と積極的に捉え、次に示す3種の新たな調査方法を考案し、2007年5月と9月の二度にわたり調査を実施することにより、軸とクラスタの再解釈に挑んだ。⁷⁾

- i 韓国中高生による日本人が図示した各クラスタの典型像の再解釈の聞き取り調査
- ii 韓国大学・大学院生による2種の軸の性格の再解釈の聞き取り調査
- iii 教員と研究者による聞き取り結果の妥当性の判断の聞き取り調査

この調査は統計的に処理されたデータ(数字)の解釈に聞き取り調査で得た情報を重ねること、韓国中高生の規範意識をより深く理解するという意味により、深層調査と名付けた。

3. 解釈過程のバイアスと誤解の構造

深層調査の「i 韓国中高生への再解釈調査」は、次の順序で実施した。

- (1) 日本側の解釈(読み取り)に基づき、各クラスタ単位に上半身イラスト(顔中心)を作成。
- (2) 韓国中高生にデータ上の特徴から想像されるイメージ像と日本側作成イラストとのズレについて聞き取り調査を実施。
- (3) 調査結果を整理し、上半身イラスト(顔中心)画を修正
- (4) 修正イラストをもとに同一の韓国中高生に再度聞き取り調査
- (5) 調査結果をもとに各クラスタの特徴を再吟味し、9種の上半身イラストの再修正版を表現



図5 韓国中高生への再解釈調査でのイメージイラストの変化

この韓国中高生への二度にわたる再解釈調査において、各クラスタの特徴に基づき日本で作成したイラストが、韓国中高生の意見で変化する過程を示したのが、図5である。最初に日本側で作成したイラストが左端、韓国中高生によるイメージ像の一度目の聞き取りによる修正図が真ん中、二度目の聞き取り後に再修正して確定した最終修正イラストが右端である。

日本側で解釈して作成したイラストが変化しなかったのは第8クラスタのみである。比較的修正度が低い第1、第4、第5クラスタでは、髪型、口元、表情表現の修正を求められた。韓国と日本で言葉や数値での理解は共有できても、その表現の仕方に差があることを示している。イラストが大きく変化した第3、第6、第7、第9クラスタは、言葉や数値のみで解釈すると全く異なる対象をイメージする危険性を示している。

いずれも、データが同じでも、読み取る主体によって、意味や具体像が大きく異なる可能性を示す調査結果である。我々は改めて韓日両国の文化の類似性と差異性をもたらす相互理解のズレと誤解に関する実証研究の必要性を痛感せざるをえなかった。

この9種の最終イラストの横に聞き取り調査対象の韓国中高生に提供した各クラスタの特徴を示す説明文を並べて一覧にしたのが図6である。本稿の読者も、まず説明文を読んでイメージを浮かべたのちに、韓国中高生が納得したイラストと比較してほしい。解釈者の違いによるバイアスは、日韓の間だけでなく、自国内の世代間においても生じることを確認できよう。

我々は、このようにイラストを用いた韓国中高生への再解釈調査により、クラスタの解釈に入り込むバイアスを開示し、調査者と対象者のあいだに生じるズレを縮小させることが可能になった。次の課題はクラスタ析出のために用いた2種の軸の解釈の妥当性である。

改めて図6をみてほしい。各クラスタの特徴が次のように記されている。

- 第1クラスタ (礼節、道徳規範を尊重し、自分の都合を優先する人で、やや男性が多い。)
- 第2クラスタ (礼節、道徳規範を逸脱し、友の都合を優先する人で、女性が多い。)
- 第3クラスタ (礼節、道徳規範を守らず、自分の都合を優先する人で、やや男性が多く、最も少ない96名が属している。)
- 第4クラスタ (二つの軸の交点／中男84、中女84、高男58、高女85／13.6%)
- 第5クラスタ (礼節、道徳規範を尊重し、中学生男性が多い。)
- 第6クラスタ (礼節、道徳規範を尊重し、友の都合を優先する人で、女性が多い。)
- 第7クラスタ (礼節、道徳規範を尊重する人もいれば逸脱する人もいて、友の都合を優先し、高校生が多い／中男70、中女96、高男86、高女124／16.4%)
- 第8クラスタ (礼節、道徳規範を逸脱する人で、高校生男性が多い。)
- 第9クラスタ (二つの軸の交点／中男45、中女56、高男57、高女62／9.6%)

各クラスタの特徴は「礼節、道徳規範」の「尊重」と「逸脱」、「自分の都合を優先」と「友の都合を優先」で示されている。深層調査の「ii 韓国大学・大学院生による2種の軸の性格の再解釈の聞き取り調査」で次に示す概念と尺度が軸の解釈として確定したためである。

I 軸：「礼節、道徳規範を守る—守らない」 II 軸：「自分の都合優先—友の都合優先」

しかし実は、日本（静岡、以下同様）の中高生調査では、I 軸を「既存規範同調—逸脱」、II 軸を「自己志向—関係志向」と名付けた。この軸の名称の変更過程において、我々は韓国と日本の相互理解を阻む最も重要な規範意識の相違点を明らかにすることができた。



図6 韓国中高生規範意識のクラスタ別の特徴

4. 相互理解を阻む規範意識の相違点

1) 韓国中高生と日本中高生の2つの軸の比較

軸の性格は図1と図2に示したように、各設問に与えられた得点順位で読み取る。たとえば日本の中高生のI軸の場合を紹介すると、得点上位に次の設問が並ぶ。⁸⁾

- 「授業中友だちが話しかけてきた時、授業中と注意する」
- 「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時、電話に出ない」
- 「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、拒否する」
- 「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、使わない」
- 「より遅く友達から会いたいと電話があった時、断る」

また得点順位下位には次のような設問が並ぶ。

- 「電車で友だちが床に座った時、一緒に床に座る」
- 「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、使う」
- 「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時、あきらめて買う」
- 「電車で疲れて座っているとことにお年寄りが乗ってきたとき、席をゆずらない」
- 「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時、電話に出る」

得点順位上位の設問は、現在の日本の社会常識（社会規範）から考えて妥当と思われる行為であり、得点順位下位の設問は社会的に認められない行為である。したがって、I軸を現在の日本社会の中に既に存在する規範（常識）に従う（同調）か、従わない（逸脱）か、という判断基準の枠組みとして位置づけ、「既存規範同調－既存規範逸脱」の軸と名付けた。

韓国の中高生の場合はどうか。日本の上位に相当する設問は次のようになる。

- 「友達からもらったボールペンが盗んだものとわかった時、絶対に使わない」
- 「授業中、友達が話しかけてきた時、『授業中だよ』と注意する」
- 「映画館の切符売場で友達が割り込んだ時、自分はしない」
- 「補充授業や塾の授業をさぼろうと友達に誘われた時、断る」
- 「前の日に学校のしたくをする」

我々は、当初、この並びを確認したとき、日本中高生調査で見出した「既存規範」への「同調」を韓国中高生にも応用できることを期待した。だが下位設問を並べてみて戸惑った。

- 「道で近所の人を見かけた時、あいさつをしないことが多い」
- 「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、そのまま座っている」
- 「友達に自分の短所を指摘された時、『言われなくてもわかっている』と思う」
- 「友達はテストで100点を取ったのに自分は取れなかった時、負けてしまったくやしいと思う」
- 「補充授業や塾の授業をさぼろうと友達に誘われた時、一緒にさぼる」

最も軸への影響度が高い「近所の人へのあいさつ」は、日本では社会規範というほど強くなく、道徳的に好ましいかどうかという程度である。また「友達に短所」や「友達は100点をとった」は、日本では守らなければ社会規範ではなく、時と場合や相手によって変化する価値

観の問題とみなされる。しかもいずれの設問も日本中高生の I 軸上では軸の性格に影響しない位置にある。これは韓国中高生の I 軸を「既存規範逸脱」の尺度では測れないことを示している。

「既存規範同調」についても、日本中高生の I 軸上では全く影響しない位置にある「捨て犬を見つけた時、自分が世話」が、韓国中高生では影響度の高い7番にあることに驚いた。この設問は日本では好ましい行為と位置付けられるが、守るべき社会規範とはみなされないからである。

我々は日本の社会規範の基準（常識）で解釈するかぎり、韓国中高生の I 軸に対して、日本中高生で見出した「既存規範同調－既存規範逸脱」の適用は困難と判断した。

II 軸の場合はどうか。I 軸と同様に、日本中高生調査の得点順位を確認すると、上位に次の設問が並ぶ。

「友だちがいじめにあっていることを知った時、味方にならない」
 「道で近所の人を見かけた時、挨拶しない」
 「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、拒否する」

また、得点下位では、次のようになる。

「捨て犬を見つけた時、世話をする」
 「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、席をゆずる」
 「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、会いに行く」

ここにあげた II 軸に強く影響する設問は、いずれも人や動物と自分との関係について選択を問うものである。しかも、上位は自分の都合を優先することを、下位は関係をもつことが選択の基準とみなせる。そのため、「関係志向－自己志向」の軸と名付けた。

韓国調査ではどうか。得点の上位5位には次の設問が並んでいる。

「道で近所の人を見かけた時、あいさつをしないことが多い」
 「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、そのまま座っている」
 「夜遅く、友達から会いたいと電話があった時、断る」
 「友だちがいじめにあっていることを知った時、自分までいじめられるのはいやだから、友達とのつきあいをやめる」
 「友達はテストで100点を取ったのに自分は取れなかった時、負けてしまったくやしいと思う」

得点下位5位に並ぶ設問は次のようになっている。

「補充授業や塾の授業をさぼろうと友達に誘われた時、一緒にさぼる」
 「夜遅く、友達から会いたいと電話があった時、会いに行く」
 「映画館の切符売場で友達が割り込んだ時、一緒に割り込む」
 「授業中、友達が話しかけてきた時、一緒に話をする」
 「友達からもらったボールペンが盗んだものとわかった時、そのまま使う」

いずれも人との関係だが、「近所の人、あいさつしない」と「お年寄り、座っている」を除

けば、全て相手は友達である。韓国の中高生も日本の中高生も「関係」がⅡ軸解釈のキーワードになることは共通している。だが、関係する相手を見ると、日本の中高生には「捨て犬」も含まれる。しかし、韓国の中高生の場合は「友達」の位置が極めて大きい。言い換えれば「友達」に限定される。

我々はⅡ軸に対しても、日本中高生の「関係志向－自己志向」を韓国中高生に適用できないと判断した。そのため、中高生時代を身近に振り返ることができる韓国の大学生・大学院生に上述した軸のデータと解釈方法を提示したあと、彼ら彼女らが経験と知識に基づき再解釈する過程を聞き取る調査を行った。その分析結果が先に示した次のような軸の名称の変化である。

I 軸「既存規範同調－逸脱」(日本) ⇒ 「礼節、道德規範を守る－守らない」(韓国)
 II 軸「自己志向－他者志向」(日本) ⇒ 「自分の都合優先－友の都合優先」(韓国)

さらにより重要なことは、この調査過程で韓国中高生の規範意識の特性と日本との相互理解の壁を示唆する言葉を二つ獲得することができた。それは「礼節」と「우리」である。

2) 礼節と우리から見る韓日規範意識のずれの構造

(1) 礼節と우리

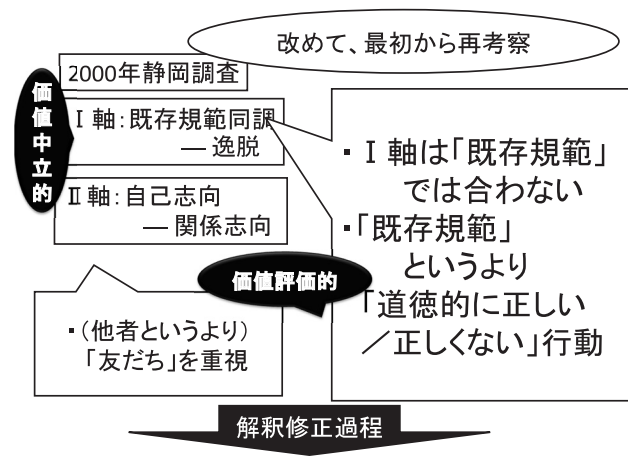


図7 軸の特徴の日韓中高生の相違点

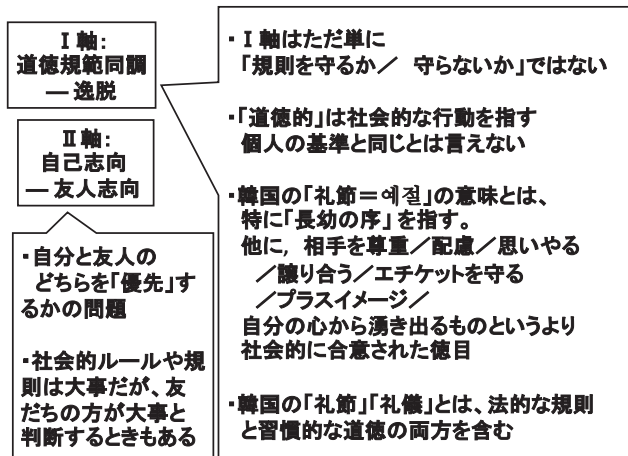


図8 第1回深層調査から

改めてこれまでの考察を整理したのが図7である。日本中高生では、規則（既存規範）に従う（同調）ことが最優先の判断軸である。あえて単純化すれば、規則の内容ではなく、「規則を守る」という「規範（価値中立的）」が日本中高生の規範意識の中核にある。

他方、韓国中高生の場合、日本の基準では「道徳的に正しい－正しくない」と判断される設問が選択されていた。日本では道徳は全員が守るべき規範ではなく、個人的な価値判断で選択すべき基準である。しかし、韓国中高生では、最優先すべき判断軸を構成する位置にある。これは、韓国社会における規範意識の中核に、誰もが認める一定の価値の序列に従った行動様式や意思決定の判断基準があることを示唆している。

このような仮説のもとで、二度にわたり実施した大学生や大学院生による論議の聞き取り調査から、我々が重要と判断した言葉を整理したのが図8と図9である。

やはり道徳が話題の中心になり、しかも誰もが守るべき社会的行動としてみなされていることを確認した。さらに、彼ら彼女らから、韓国における規範意識の特徴を理解するうえで最も重要となる言葉を聞くことができた。「礼節」である。引き出したのは山田知佳の次の質問である。

「日本では学校の先生が子どもたちに対して、『ルール（決まり）を守りなさい』と注意しますが、このような場面において韓国でよく使われる表現は何ですか」

「礼節」という答えを聞き驚いた。日本では特別な儀式での礼儀・作法を意味する言葉であって日常生活では使われない。ところが韓国においては、日本の教師が学校で最も頻繁に発する言葉である「決まりを守りなさい」と同じ場面で使用される。これは規範意識を内在化する社会化の過程で最重要の行為とみなせる。我々は韓国中高生と日本中高生の規範意識の相違点の根はここにあるのでは、との仮説をもった。そのため、「礼節」の内容を質問した結果が図8である。いずれも人間関係にかかわる徳目とみなせるが、韓国人の読者には自明のことであろう。そこで質問した山田の記録を紹介する。韓国と日本の相違点が理解されよう。⁹⁾

韓国の『礼節』とは、日本で言う『道徳』に近いのではないかと思われた。ところが、学生から『友達が間違っている、無理やり正すのは相手を尊重しないことだから礼節に反する』という意見が出た。日本人が考えると、友達を正さないことは「悪いこと」である。学生の意見は信じられないものがあった。／ 日本と韓国では「良い／正しい」とされることと「悪い／正しくない」とされることは異なっているようである。それはそれを決めている『基準』が違っているからである。『基準』を表す言葉も日本とは意味が違ってもよいかもしれない。

「礼節」は「長幼の序」に代表されるように、対人関係についての価値評価的な「社会的に合意された徳目」である。「決まり」は所属する組織や集団に共有される価値中立的な約束事である。韓国と日本の中高生にとって「礼節」と「決まり」は教師から守ることを繰り返し強制される点では同じだが、形成される規範意識の内容は大きく異なる。日本では所属する組織や集団のルールに従うことを求められ、韓国では直接対面者への伝統的価値に基づく行動や判断が重視される。

I 軸: 礼節を守る — 守らない

- ・単純に「礼節を守る／守らない」では説明できない
- ・「礼節」と一言で言うのはちょっと合わない
- ・しかし、「道徳的」では、抽象的／一足飛びになってしまっている
- ・「礼儀」とはエチケット、「礼節」は伝統・長幼の序、「道徳」は教科書的で実生活には合わない
- ・「礼儀」の上位の概念としての「礼節」、「礼節」の上位の概念としての「道徳」
- ・「道徳的」とは、気持ち的な問題
- ・「礼節」とは、行動にして外側に見せなければならない
- ・人間関係や社会関係上で、礼節は目に見えてくるので道徳より大事
- ・礼節は伝統的に守ってきた、守らなければならないので重要視する
- ・法は法なので、そこまで認識は強くない
- ・韓国はやはり「우리=私達」を重視するため、個人主義は利己的に見える

II 軸: 自分の都合優先 — 友だちの都合優先

問題なし

図9 第2回深層調査から

これで韓国と日本の中高生の規範意識の相違点の根を理解できたと思えた。だが、礼節は対人関係のそれも伝統的な判断基準である。すべての道徳的世界を規定するわけではない。まして21世紀の韓国社会の秩序は13世紀に始まる朝鮮時代に淵源をもつ徳目のみで維持することは不可能である。大韓民国としての法制度や外国からの流入も含めた慣習が果たす役割は大きいはず。それらが「礼節」とどのような関係にあるか。大学生と大学院生への二度目の調査の課

題になった。その結果を整理したのが図9である。

この第2回深層調査は「法律で決められたことと『礼節』のどちらを優先させるか」との山田の問と「礼節は伝統的に守ってきた、守らなければならないので重要視する。法は法なので、そこまで認識は強くない」との返答で始まった。これもまた日本人の常識とは大きく異なる。¹⁰⁾ 再び山田の記録を紹介しよう。

日本人にとって法律で決められたことやルールは絶対であり、守らなければならないことの最上位に位置していると言える。欧米諸国から日本に法律の概念が入ってきたのは明治以降だが、それ以来徹底して理由はともあれ『法・規則』は『守るべきこと』として意識付けされている。韓国人にとっても法律は朝鮮の開国以来欧米諸国から入ってきた概念であることは日本と同じだが、それ以前の長い時間と歴史を持つ『礼節』は『守るべきこと』として徹底されてきた。韓国では法律より「礼節」の方が規範として上位にあり続けているということだろう。

さらに、「우리」に対する意見をうけての山田の解釈も紹介しよう。「韓国はやはり『우리』を重視するため、個人主義は利己的に見える」との学生からの意見に対しての記録である。¹¹⁾

また、韓国特有と言える「우리」についても意見が出た。『우리』とは、親子、兄弟、友人、上司と部下、先輩と後輩など、顔が分かる範囲の狭い関係を指し、この関係にある人を非常に大事にする考え方である。逆に言えば、『우리』以外の人物を排除する傾向があり、『우리』と『우리』以外に対する態度は正反対と言える。／『우리』を重視する韓国において、個人の思いに従ってひとり別行動をすることは非常に嫌われる。第1クラスタや第3クラスタの人物が個人主義に見えるために嫌われることは、『우리』からはずれるためとも言える。『우리』と「礼節」は密接に関係していることが推測される。

この山田の記録と解釈は、韓国の「礼節」や「우리」の専門研究者からみれば浅く誤った理解があるかもしれない。だがここで重要なのは思想史や哲学上の問題ではなく、現在の韓国で生まれ育つ中高生の規範意識に組み込まれている「礼節」や「우리」である。その意味について語る韓国の大学生・大学院生の言葉である。それを記録し、自分の中にある規範意識との対比で解釈する日本の大学院生の言葉である。すなわち、分析の対象には韓国中高生や大学・大学院生の言葉だけでなく、日本の大学院生の記録や解釈をも含まれる。

(2) 規範意識のずれの構造

我々は、このような観点からの分析で得た結論に基づき、韓国と日本の中高生の規範意識の相違点を明確にする二つの軸のモデル図を作成した。それが図10と図11である。

まず韓国中高生から析出したⅠ軸を規定する規範意識の優先順位は「伝統的な礼節」>「現代的な法や規則」>「慣習としての規範」と明確である。だが、明文化される法と異なり、家庭や学校での社会化によって形成される「礼節」は、社会の変化の影響を受けやすい。また「礼節」は対人関係のルールであるため、個別的な人間関係に左右されやすい。これにⅡ軸に示す「우리」の範囲の狭さが重なることによって、普遍的な法よりも家族、友人、子弟などの個別的な情や利害が優先される人治社会のマイナス面につながる危険性がある。あるいは、「礼節」を尽くす対象が政治家や知識人である場合、「우리」の排除の構造で正当化されることにより、

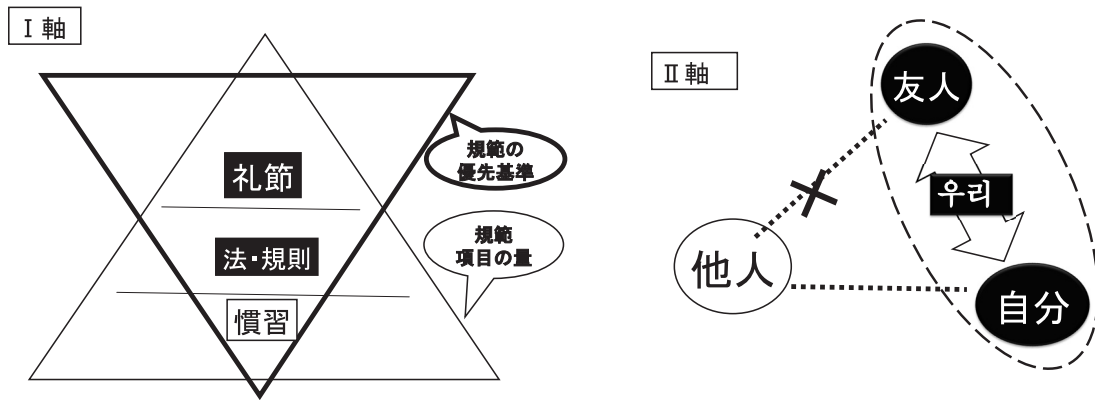


図10 韓国中高生の規範意識の構成要素（構造）のモデル化

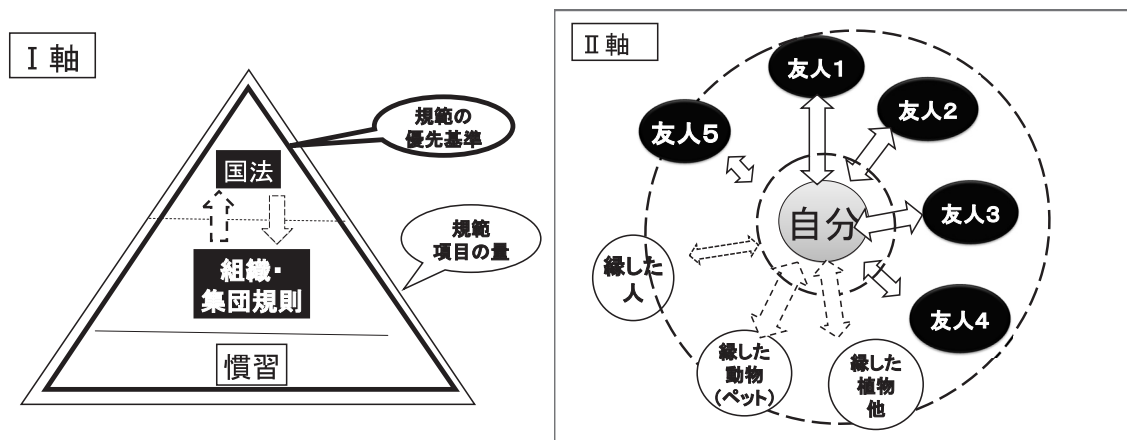


図11 日本中高生の規範意識の構成要素（構造）のモデル化

「우리」の外にいる別の政治家や知識人との対立が必要以上に強調され妥協できなくなる。

日本の中高生から析出した I 軸ではどうか。規則を守ることが重要なため国の法が定める順で I 軸は形成される。だが、日常の行動は所属する組織・集団の規則に従う。国の法は身近ではないため、日常の判断に活用する知識のパッケージにストックされにくい。その結果、「規則を守る」という規範意識のなかに、所属する組織や集団の利害を法律よりも優先させる選択肢が組み込まれる。また II 軸に示す同心円的な人間関係は、対立を防ぐ機能をもつが、その輪から外されることへの必要以上の不安感の温床にもなる。

その結果、外されることを避けるために選んだ所属集団への忠誠が、企業コンプライアンスが問題視される背景ともなる。その予防のために、友人という名の他者との過度の関わりを避ける（迷惑をかけない）ために、自分を守る小さなフィルターで他者や癒し系との関係の距離を調整するが、それは社会との関係を閉ざす（ひきこもる）壁にもなる。

もちろん、ここに紹介した問題は、韓日双方とも中高校生の段階で生じることではない。だがここで確認できた規範意識を規定する二つの軸の性格に基づき描いたモデル図は、両国国民の規範意識の原型とみなせる。これが我々の出した結論だが、問題は相互理解教育の課題である。上記の分析の妥当性に関する「iii 教員と研究者の判断の聞き取り調査」から我々が重要と

判断した観点を紹介することで解決への糸口を提示したい。

5. 韓日・日韓相互理解教育の新たな課題とその解決の方向の提示

我々は2008年9月、新たな李明博政権における韓日交流のキーパーソンになると思われる国会議員、90年代初頭から日本漫画の翻訳出版の編集をてがけ現在は韓国漫画の日本での出版を進める出版社社長、日本で学位をとり韓国の教育改革にとりくむ研究者を対象に聞き取り調査を実施した。聞き取りは長時間に及び内容も多岐にわたったが、その過程で次のような韓日・日韓相互理解を阻む要因を解明するための観点が明らかになった。

1) 多様性の再確認と一元的ラベリングの排除

(1) 韓国の日本理解と日本批判、日本の韓国理解と韓国批判を枠付ける多様な要因の解明

初めに日本の大学で学位をとり、韓国の国会議員になった与党議員の言葉を紹介したい。

彼は日本の戦後の経済発展や文化交流での多様性は認めるべきと語る。だが、過去の歴史の解釈については、日本側が提示する多様な解釈を受け入れることは困難であることも強調した。日本での生活が長く、政治家になる前から韓日関係の好転のために力を尽くしてきた知識人である。その発言の意味は重い。だが、近年の韓国における歴史解釈の問題は、日本との関係だけではなくなっている。中国との関係でも問題視される。本来、国の境を接する大国との対立点の深刻度は、日本との関係とは比較にならないほど深いはず。韓国内における論争も激しい。

少なくとも、韓日双方の政治的リーダーや知識層のなかに、互いの立ち位置を相対化する視点と一方的な非難のラベリングが生む不毛な対立を排除する志が根付くことを期待したい。

そのための準備作業として、いうまでもなく、韓国と日本との関係だけでなく、中国や韓国内の対立においても、我々が試みた互いの理解と批判が生じる過程の実証研究が必要である。

(2) 嫌韓感情と嫌日感情の不合理性の開示

しかし、残念なことだが、近年、日本では嫌韓をセールスポイントにした漫画が出版されるようになった。それに対抗して韓国でも嫌日を旗印にした反論漫画が出版される。韓国側、日本側を問わず、相手を非難するために過去を利用することは、それ自体が不幸なことと考える。

歴史上の出来事は単なる事実ではない。事実としてとりあげる段階から語る側の評価が入り込む。歴史的事実は一つでも、その意味は関わった人の数だけある。互いの判断基準のズレを認めない批判は、理解を阻む壁を高くするだけである。韓国で最も優れた日本の翻訳漫画の編集者であり、韓国漫画を日本漫画雑誌に連載させた出版社の社長の言葉である。

ここでも問うべきは、歴史的事実の認定と評価の前提にある、歴史を語る者の立ち位置である。しかし、それが立場と利害を意図的に結び付けるイデオロギー批判のレベルに止まれば、新たな対立を生むだけである。意図せざるかたちで入り込む誤解の構造を実証的に明らかにすることでなければ、多様性を認め合うことの合理性に基づく相互理解にならない。

2) 相互の類似性と異質性についての情報提供と理解のための教育プログラムの開発

逆説的だが、異なる文化間の相互理解は、相手との類似性よりも異質性を知ることから始まる。同じではなく異なるからこそ、互いの違いを開示する作業とそれを同じ目の高さで認め合う努力が重要になる。とりわけ類似性と異質性が複雑に絡み合っている韓国と日本の相互理解

において、このような作業と努力は必要になる。その重要性を理解する一助として、我々の調査研究から韓日誤解の構造の一端を指摘しておきたい。

上に整理したように、韓国と日本の間には、規範意識を規定する基準と評価の双方において

韓国	日本
① 「人として守るべき長幼の序=『礼節』」	VS. 「慣習・形式としての『礼儀』」
② 「肯定的判断基準としての『道徳』」	VS 「個人の問題に解消する『道徳』」
③ 「『自分』より『友』との優先関係」	VS 「『自己』と『他者』との等距離関係」

誤解を生む構造が埋め込まれている。韓国は「法」や「慣習」よりも「礼節」を重視する。「自分」を犠牲にしても「友」のためにしてあげることが優先する。しかし、日本では「礼節」は形式で「法」の遵守を重視する。「法」を無視した特別扱いは「友」に迷惑をかけるため、他の人たちと同様に接することが正しいと判断する。もし、韓国の政治的リーダーが韓国の基準によって、日本の政治的リーダーに「友」としての行動を期待したらどうなるか。逆に、日本の政治的リーダーが日本の基準によって韓国の政治的リーダーに「友」としての行動を期待したらどうなるか。

これまでの両国の様々な分野の交渉において、情のこもった特別の配慮を求める韓国と法に従う条件でしか応じない日本とのあいだで、予期せぬ対立（誤解）が生じてこなかったか。この答えは本稿の読者が解かれること期待する。我々は「日本批判と韓国批判の判断基盤のズレの開示」の重要性を改めて強調するにとどめたい。本節のタイトルに「相互の類似性と異質性についての情報提供」と記した理由である。

さらに、本稿において、調査研究の結論だけでなく、煩瑣を承知で調査の方法と分析の過程を詳述したのは、「理解のための教育プログラムの開発のモデル」として提示することを意図したからである。

そして情報提供と教育プログラム開発のいずれにも活用していただきたい教材を3点、最後に紹介しておきたい。

ひとつは山田が描いた「韓日相互誤解のモデル図」(図12)である。韓国人と日本人を模した人形が、ともに「私は「土俵」にいるのに、どうして君と相撲がとれないのかな？」とつぶやいている。「相撲は「土俵」で取るもの」ということは「お互い知っている」が、「立っている土俵が違う」ということには「気が付いていない」というモデル図である。

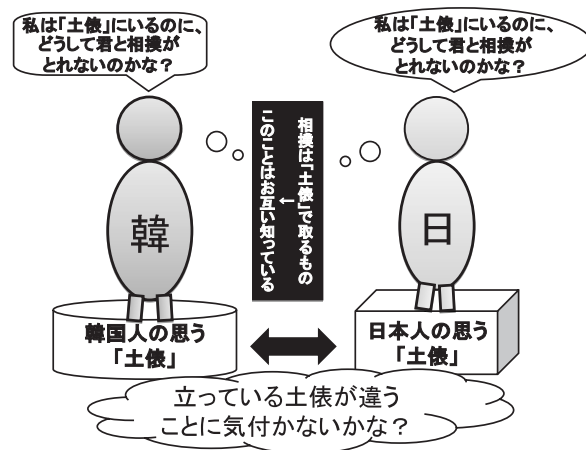
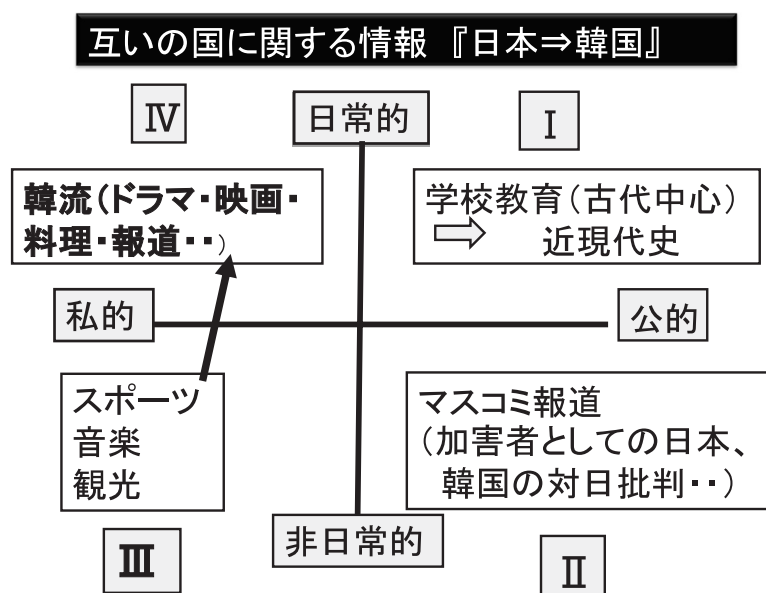
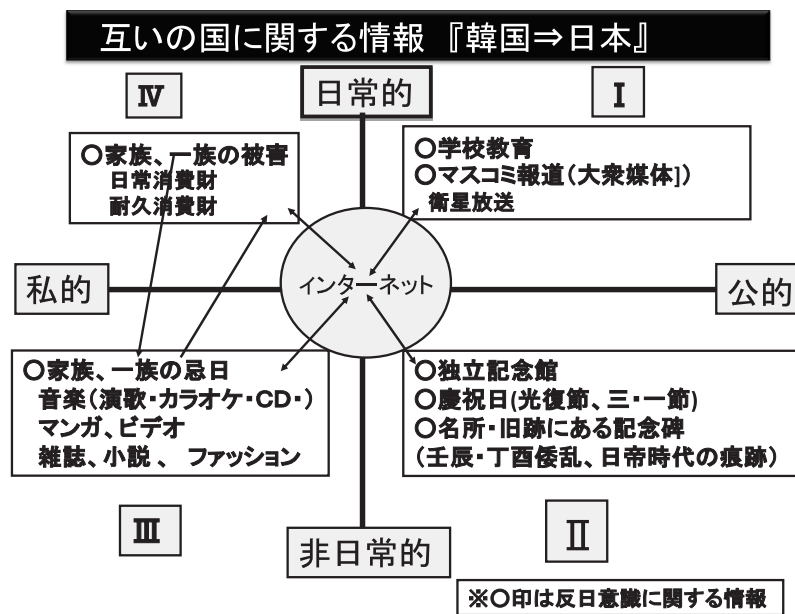


図12 韓日相互理解モデル図

もう一つは馬居が作成した「互いの国に関する情報『韓国⇒日本』」(図13)と「互いの国に関する情報『日本⇒韓国』」(図14)である。「日常的-非日常的」と「公的-私的」の軸を交差させることでできる四種の面を用いて、韓国と日本それぞれにおける互いの国に関する情報

の特徴を整理したモデル図である。両図の比較から、互いの国に関する情報がどのように位置づけられているかを読み取ってほしい。さらに、すべての情報を日常化する韓国のインターネットが果たす機能の課題を考えるモデル図として活用されることを期待する。¹²⁾

そして最後に、我々が意図する教育プログラムは、上記の特徴の確認や考察をはじめとして、この三種のモデル図の意味を読み取ることから始まることを重ねて記しておきたい。



注記

- 1) 調査結果の主要部分は、『静岡大学教育学部研究報 (人文・社会科学編) 』において「韓国における日本大衆文化の調査研究 (1) ~ (9)」として公表。韓国では韓国日本学協会編『日本文化研究』第4集 (2000年10月) に馬居が「韓国青少年における日本大衆文化の接触状況にみる受容論議の問題性と課題」を発表。
- 2) 「韓国における日本大衆文化の調査研究 (9) - 日本文化開放後における中高生の日本批判の特徴 -」(『静岡大学教育学部研究報 (人文・社会科学編) 第56号』2006年) p. 1
- 3) 「日韓相互理解教育の新たな課題 - 韓国青少年への継続調査を手がかりに -」(谷川彰英編『日韓交流授業と社会科教育』明石書店 2005年) pp. 285~290
- 4) 日本の中高生に対する調査と調査方法に関しては馬居政幸他「青少年に関する調査研究」(『静岡大学教育学部研究報 (教科教育学編) 第34号』2003年) を参照いただきたい。
- 5) 調査対象者

	中学校	高等学校	計
ソウル	524	576	1100
大田	336	280	616
釜山	312	277	589
計	1172	1133	2305

多変量解析が可能な
有効回答者数は2293名

6) 聞き取り調査による修正一覧

		韓国中高生への聞き取り調査で修正した日本中高生用質問内容と修正内容 (多変量解析用の質問)
1	静岡	10-①「電車で友だちが床に座った時、一緒に床に座る」
		10-②「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」
	韓国	10-①「映画館の切符売り場で友達が割り込んだとき、一緒に割り込む」
		10-②「映画館の切符売り場で友達が割り込んだとき、自分はしない」
2	静岡	11-①「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、乗せてあげる」
		11-②「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、二人乗りを拒否」
	韓国	11-①「授業をさぼろうと友達から誘われたとき、一緒にさぼる」
		11-②「授業をさぼろうと友達から誘われたとき、断る」
3	静岡	18-①「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時 電話にでる」
		18-②「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時 電話に出ない」
	韓国	18-①「映画鑑賞中に携帯電話がかかってきたときの対応 電話にでる」
		18-②「映画鑑賞中に携帯電話がかかってきたときの対応 電話にでない」
4	静岡	14-①『男はたくましく、女はやさしい』という考え方について、男と女は違う」
		14-②『男はたくましく、女はやさしい』という考え方について、性で決めない」
	韓国	14-①『男は絶対に泣いてはいけない、女はやさしくなければならない』という考え方を、当然だと思ふ」
		14-②『男は絶対に泣いてはいけない、女はやさしくなければならない』という考え方を、当然だとは思わない」
5	静岡	12-①「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時 あきらめて買う」
		12-②「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時 発見まで探す」
	韓国	12-①「買ったばかりの参考書をなくしたとき、もう一度同じ参考書を買う」
		12-②「買ったばかりの参考書をなくしたとき、最後まで探す」

		韓国中高生への聞き取り調査で修正した日本中高生用質問内容と修正内容（一般の質問）
1	静岡	目立ちたがり
	韓国	何でもやりたがる／前に出たがる (무슨 일이든 잘 나선다.)
3	静岡	人の目を気にする
	韓国	自分が何かするとき、ヌンチを気にする (무슨 일을 할 때 다른 사람의 눈치를 본다.)
8	静岡	これだけはゆずれないというものがある
	韓国	これだけは譲歩できないものがある (モノや自信感、アイデンティティ) / 이것만큼은 없다고 생각하는 것이 있다. (물건, 자신감, 정체성)
9	静岡	なし
	韓国	追加「人見知りをする」
10	静岡	なし
	韓国	追加「感情的である」

- 7) 第1回深層調査（2007年5月23日～29日）と 第2回深層調査（2007年9月6日～11日）は、ともに①大田市と釜山市内での中学生、高校生、大学生それぞれによる長時間の集団論議のVTR記録、②ソウル市内の日本からの帰国子女（大学生）による集団討議のVTR記録、日本留学経験のある大学院生と日本研究者への聞き取り調査からなる。
- 8) 馬居政幸他（2003）pp. 13～16参照
- 9) 山田知佳「韓国青少年の規範意識に関する実証的研究—中・高・大学生に対する量的・質的調査を通して—」（2007年度修士論文 静岡大学大学院教育学研究科） 116ページ
- 10) 山田知佳（2007）122ページ
- 11) 山田知佳（2007）123ページ。
- 12) 馬居のモデル図の詳細は「韓国における日本大衆文化の調査研究（9）—日本文化開放後における中高生の日本批判の特徴—」 pp. 20～25を参照いただきたい。

馬居と李明熙は、本稿と同趣旨の韓国語の論文「韓国中・高生の規範意識の特徴と韓日相互理解教育の課題」をまとめ、幸いにも韓国日本教育学会の審査をへて、同学会の研究誌『韓国日本教育学研究』Vol. 14, No2, に掲載された。本稿は日本の読者を対象に大幅に加筆修正したもので、別の論文になるが、本稿の要旨を韓国語で理解いただくために、上記論文の抜きずりをPDFに加工・縮小し、次ページ以降に付加させていただく。

한국일본교육학연구
Korean Journal of the Japan Education
2009, Vol. 14, No. 2, pp. 39~59

**한국 중·고생의 규범의식의 특징과
한·일 상호이해 교육의 과제**

우마이 마사유키 · 이명희

한국일본교육학회

본 학회지는 2007년도 한국학술진흥재단으로부터 등재 후보지로 선정되었음을 알려드립니다.

한국 중·고생의 규범의식의 특징과 한·일 상호이해 교육의 과제

우미이 마사유키 · 이명희¹⁾
(시즈오카대학교 · 공주대학교)

<요약>

본 연구는 한국 중·고생의 규범의식과 일본 중·고생에게 나타나는 규범의식의 특징을 비교함으로써 한·일 양국의 상호이해 교육을 위한 새로운 방향을 제시하고자 한다. 이를 위해 한국 중·고생 2,905명을 대상으로 설문조사를 실시하였으며, 다변량 해석 기법(대응일치분석)을 활용하여 2종류의 축(I축과 II축)과 경향이 유사한 9개 그룹을 구분하여 규범의식의 구조를 파악하였다. 또한 한국 중고생의 규범의식에 대한 조사 결과물 도출함에 있어서 해석도움이 '일본 중·고생과 동일시한다'는 편견을 최소화하기 위해 다음과 같은 3가지, 계층을 대상으로 한 심층조사(질단문 및 채취조사)를 실시하였고, 이를 통해 규범의식에 대한 결과물 재해석하였다.

심층조사는 1) 한국 중·고생을 대상으로 9개의 전형적인 그룹을 재해석하기 위해, 2) 한국 대학·대학원생을 대상으로 2개의 축에 대한 재해석은 위해, 3) 교원과 연구자 대상으로 1)과 2)에 대한 타당성 검토 등을 위해 시행되었다. 1)의 조사와 분석을 통해 각 9개 그룹에 대한 특징을 일괄 일러스트로 표현하여 재해석하였다. 한국과 일본의 상호이해를 막는 규범의식은 ii)의 조사와 분석을 통해 제시되었으며, 서로 간 가장 큰 개념차이를 나타내는 말은 '세척'과 '우리'로 드러났다. 마지막으로 iii)의 조사와 분석에서는 한·일 양국의 뿌리 깊은 행한(繼傳)·행일(兼日) 개념은 서로 다른 문화에서 비롯된 '오해의 구조'임을 발견하였으며, 이를 극복하기 위해서는 문화의 유사성과 이질성에 대한 정보제공과 이해를 위한 교육이 필요함을 제시하였다.

주제어 : 규범의식, 상호이해 교육, 다변량 해석, 대응일치분석, 심층조사

1) 교신저자 : 이명희, mihlee@kongju.ac.kr

I. 서론

우리는 1995년도부터 3기의 10년간에 걸쳐 일본 문부과학성의 과학연구비보조금(책임자 : 우미이 마사유키)을 얻어 다음과 같은 3가지 가정하에, 한국청소년의 일본과 일본문화에 대한 접촉상황과 평가에 관한 조사연구를 실시하여 분석결과를 발표해 왔다(우미이 마사유키, 2001).

- 문화나 에니메이션으로 대표되는 일본의 청소년문화를 한국과 일본의 청소년이 실시간으로 공유함으로써, 과거의 역사에 기인하는 상극을 넘는 '공감대(共感帶)' 혹은 '교감(交感)'이 양국 청소년 사이에 형성되고 있다.
- 한국 청소년이 일본문화를 요구하는 배경으로는 일본과 같이 한국도 정보의 글로벌화와 소비 사회화가 진행되고 혹은 저출산 고령의 인구간소 사회로 이행하는 등, 산업화로부터 정보화 단계로 이행한 사회에서 자라난 사람들이 갖는 생활 구조의 변화가 존재하고, 그 결과 이것들의 변화가 초래하는 문제의 공유화도 한·일 양국 청소년들 사이에 진행되고 있다.
- 격변의 현대사회가 만들어 내는 문화와 문제를 공유하는 한·일 양국 청소년들에게 있어 더 중요한 것은 과거의 역사가 아니고 현재의 미래의 과제다.

그리고 10년에 걸친 본 조사연구의 총괄로서 상기의 3가지 가설을 구체화하는 실천 방법을 모색하여 한·일양국의 상호이해 교육 추진을 위한 과제를 다음과 같이 3가지로 요약하였다(馬屋政幸 · 李明熙²⁾他, 2006).

- 인터넷을 대표로 하는 IT화의 진행으로 파생되는 문제에 대한 실증 연구와 상호이해 추진을 위한 미디어 소양(media literacy) 육성 및 정보 사이트를 증설하는 일이 급선무다.
- 문화의 글로벌화에 따라 파생되는 상호 인식과 평가의 차이(오해)에 관한 실증 연구를 촉진하는 동시에, 양국의 문화를 서로 함께 소유하기 위한 기회를 확대하는 시책이 필요하다.
- 세대 간이나 2개국 간의 대립을 넘는 아시아적 시민권십(citizenship)이라고도 해야 할 공유 가능한 가치와 행동양식의 구축을 위한 도전과 그로 인한 과제를 해결하는 과정을 공유하는 기회의 제도화가 필요하다.

그러나 본 조사가 종료하는 2005년도에 급격하게 고양된 일본 비판 분위기에 부딪혀 조사결과를 얻을 수 없게 되었다. 그리하여 한국에서 나타난 일본 비판의 배경

산 과정에 대한 특성을 다음과 같이 재정의(再定義) 하였다(馬居政幸, 2005).

- 일본과의 관계가 깊어지는 것과는 별도의 차원에서 한국인과 한국사회의 일본에 대한 의식은, '공정'과 '부정' 그리고 '아는 쪽도 아니다' (중간과)이라는 3종류의 층이 경쟁 상태에 있다. 게다가 이 3종류의 층은 한국인이 3종류로 나뉘진다고 하기 보다는 개개인의 마음속에 3종류의 층이 잠재한다고 간주해야 한다.
- 그 결과, 일본과의 관계가 좋을 때는 일본에 대한 긍정 의식, 악화되면 일본에 대한 부정 의식이 현재화한다. 특히 영토나 역사 문제 등, 한국의 아이덴티티와 관련된다는 문제가 생겼을 때는 중간과가 비판과에 가해져 일본에 대한 비판 의식과 행동이 다수과가 된다.
- 이러한 경쟁을 조사 시작 단계인 90년대보다도 심하게 증폭시키고, 한·일 간 상호이해를 막는 새로운 벽으로 될 가능성을 가진 사회장치가 IMF위기 이후 급격하게 보급된 인터넷이다.

한·일 양국간의 관계 혹은 교류를 논의함에 있어 역사 인식 문제는 피할 수 없는 과제이며 과거 역사문제에 대한 책임 있는 대응과 논의가 있어야 한다. 그럼에도 불구하고 재정의 작업과정에서 필자들이 중시한 것은 현재와 미래이다. 왜냐하면 서로를 대등하게 생각하는 한국인과 일본인이 자라고 있는 사실을 간과해서는 안 되기 때문이다. 또한 다음의 2가지 이유도 간과할 수 없다고 보기 때문이다.

첫째는 동아시아라고 하는 무대에서 생기는 대경쟁 시대를 서로 경쟁하며 살아가지 않으면 안 되는 시대이다.

둘째는 출생률 저하와 고령화를 상충을 대표로 급격한 공업화와 정보화에 수반하는 사회시스템의 변동이 초래하는 새로운 문제의 해결을 서로 나라의 경쟁을 넘어서 함께 풀어야 하는 시대이다.

경쟁자인 한편, 서로 지지하는 것도 요구되는 한·일 양국 청소년이 공유해야 할 현재와 미래의 문제 혹은 과제는 무엇인가? 본 연구는 1995년에서 2004년까지 10년 조사연구를 토대로 한국 중·고생과 일본 중·고생의 규범의식 구조를 비교한 것으로써, 앞서 언급한 내용을 한국 중·고생의 의식과 행동에 대한 내재적인 이해를 통해 논의하고자 한다.

II. 연구방법

1. 연구대상과 연구절차

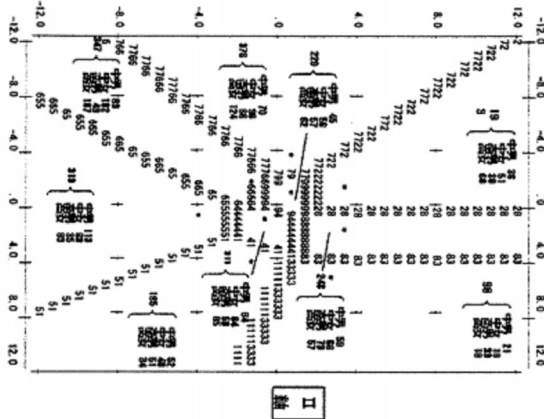
연구대상은 설문조사와 심층조사에 참여한 그룹으로 구분된다. 설문조사는 서울, 부산, 대전의 중학교 2학년생과 고등학교 2학년생 2,905명(다변량해석이 가능한 유효회답자수는 2,283명)을 대상으로 2004년 12월에 실시하였다. 심층조사는 집단토론과 청취조사로 진행되었으며, 조사대상이 한국 중·고생임에도 불구하고 조사결과와 해석모델이 일본 중·고생이고 해석자의 해석과정에서 생기는 편견을 최소화하기 위해 총 2회 실시하였다. 제1회(2007년 5월 23일~29일)에는 대전과 부산의 중학생, 고교생, 대학생을 대상으로, 제2회(2007년 9월 6일~11일)는 서울 시내의 일본으로부터 귀국자녀(대학생)를 둔 일본연구자와 일본 유학 경험이 있는 대학원생을 대상으로 하였다. 또한 심층조사에 대한 타당성을 위해 국회의원과 1990년대 초반부터 일본 민화의 번역·출판·편집을 하였고 현재는 한국 민화의 일본 출판을 진척시키는 출판사사장, 일본에서 학위를 취득하고 한국의 교육 개혁에 도전하는 연구자를 대상으로 2008년 9월에 청취조사를 실시했다.

2. 자료수집 및 분석

연구의 최초 자료수집은 설문조사를 통하여 이루어졌고, 분석과정 중에 한·일간(조사자와 조사자 대상의) 문화적 차이에서 오는 편견을 최소화하기 위해 추가로 심층조사를 실시하였다. 설문조사의 경우 일본 중·고생의 규범의식 구조와 비교하기 위해 2001년 일본 중·고생의 규범의식 특징을 제시한 조사연구에서 사용된 설문지와 분석방법을 활용하였다. 일본에서 사용된 분석방법은 규범의식에 관한 18개 쌍의 비교, 즉 36개 질문에 대한 조사결과를 다변량 해석(SPSS, 대응일치분석: Multiple Correspondence Analysis)에 의해 규범의식의 큰 틀을 결정짓는 2개의 축을 식출하고, 그 축을 기준으로 조사 대상을 부수의 그룹(cluster)으로 분류(그룹 분석+편별 분석)하여 특징을 읽어내는 조사·통계방법이다(馬居政幸 他, 2003).

본 연구에서는 이 방법에 의거하여 우선 한국 중·고생 규범의식의 구조를 찾아내기 위해 2종류의 축을 식출하였다. 그 다음 축의 특징을 읽어내기 위해, 즉 식출을 위한 수량화에 의해 주어진 특점에 따라 36개의 설문을 나열하였다. 그

라고 식물원 2개의 축으로 이차원 그래프를 작성하고, 그 평면상에 36개 설문에서 주어지는 특점을 구획(plot)화 하였다. 그 공간 위에 조사 대상자에 대한 수량화로 얻을 수 있는 대상(2,305명)의 특징(각 설문항의 회답에 근거하는 각 샘플마다 수량화에 의해, 36개 설문의 수량화와 똑같이 I 축, II 축에 대한 특점이 2,305명 샘플에 각각 주어짐)을 이용하여, 회답 경향의 유사성으로 조사 대상의 그룹(cluster) 분석을 행하였다. 이 분석에서는 최소 그룹이 100명 이상 되는 9개의 그룹을 선택했다(그림 1 참조). 분석은 27가지 축의 특징을 읽어내는 작업과 9개 그룹의 특징을 다른 조사항목과의 교차 출제 결과로 읽어내는 작업으로 구성된다.



[그림 1] 구범의식에 관한 그룹분석(9개의 그룹)

마지막 단계에서는 심층조사를 실시하여 데이터에 근거하여 해석한 한국 중·고생의 특징을 검증하고 해석과정에서 오는 편견과 조사자와 조사자 대상의 문화적 차이를 최소화하기 위해 다음의 3가지 새로운 조사방법을 고안하였다.

1) 한국 중·고생 대상 일본인이 그림으로 제시한 9개 그룹의 전형상을 재해석하기 위한 청구조사
2) 한국 대학·대학원생을 대상으로 한 2개 축의 성격을 재해석하기 위한 청구조사
3) 교관과 연구자 대상으로 위 청구조사 결과의 타당성 판단을 위한 청구조사

III. 연구결과

1. 해석과정의 편견과 오해의 구조

청취조사 방법 중에서 '1) 한국 중·고생 대상의 재해석 조사'는 다음과 같은 순서로 실시하였다.

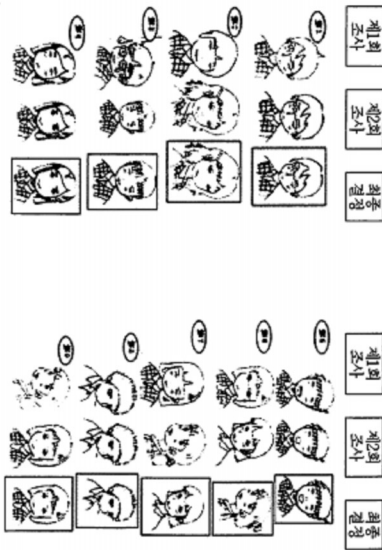
- 일본축의 해석에 근거하여 각 그룹 단위로 상반신 일리스트를 그림으로 표현.
- 한국 중·고생에게 데이터상의 특징으로부터 상상되는 이미지상과 일본축이 작성한 일리스트간의 차이에 관한 청구조사 실시.
- 조사결과를 정리하여 상반신 일리스트를 수정.
- 수정 일리스트를 바탕으로 동일한 한국 중·고생에게 다시 청구조사 실시.
- 조사결과를 바탕으로 각 그룹의 특징을 재검토하고, 9가지 상반신 일리스트 재수정판 표현.

이 조사과정에서 각 그룹의 특징에 근거하여 작성한 일리스트의 변화들 제시한 것이 [그림 2]이다. 처음 일본축에서 작성한 일리스트가 좌단, 한국 중·고생을 대상으로 이미지 상에 대한 청구조사를 하여 수정한 그림이 중앙, 두 번째의 청구조사 후 재수정하여 작성한 최종 수정 일리스트가 오른쪽 말이다. 일본축 해석 일리스트가 변화되지 않은 것은 제8 그룹뿐이다. 비교적 수정도가 낮은 것이 제1, 제4, 제5 그룹이며, 한국과 일본에서 말이나 수치의 이해는 공유할 수 있어도 그 표현의 방법에는 차이가 있는 것을 나타내고 있다. 일리스트가 크게 변화된 것이 제3, 제6, 제7, 제9 그룹이며, 말이나 수치만으로 해석하면 전혀 다른 대상을 이미지 하는 위험성을 나타내고 있다. 데이터가 비록 갈더라도 읽는 주제에 따라 의미나 구체성이 크게 다른 가능성을 가리키는 조사결과다.

아래 9가지 일리스트의 최종 수정판 앞에 청구조사 조사대상의 한국 중·고생에게 제공한 각 그룹의 특징을 나타내는 설명 문장을 제시하여 일괄할 수 있도록 한

한국 중·고생의 규범의식의 특징과 한·일 상호이해 교육의 과제

것이 <표 1>이다. 해석자의 차이에 따른 편견은 한·일간 뿐만 아니라, 한국내의 세대간에서도 생기는 것을 확인할 수 있다. 이렇게 일러스트를 이용하여 한국 중·고생을 대상으로 재해석 조사를 행함으로써 그들의 특징에 대한 해석에 불가피하게 들어가는 편견을 드러내고 또 축소하는 것이 가능하게 되었다. 다음 과정은 그 분석출을 위해 사용한 2개축에 대한 해석의 타당성을 확보하는 일이다.



[그림 1] 9개 그룹의 재조사를 통한 일괄 일러스트 조정

<표 1>에서 제시된 '예절, 도덕규범을 지키지 않는다', '자신의 행편을 우선한다-친구의 행편을 우선한다'라고 하는 개념과 척도는 먼저 나타낸 'II' 한국 대학·대학원생을 대상으로 한 2개축의 재해석을 위한 창작 조사에 의해 확정된 축의 해석이다. 전자가 I 축, 후자가 II 축이지만, 일본의 조사에서는 I 축을 '기존규범 동조-일탈', II 축을 '자기지향-관계지향'이라고 명명하였다. 이렇게 축의 명칭에 대한 변경 과정에서 한국과 일본의 상호이해를 막는 가장 중요한 규범의식의 상위점을 밝힐 수 있었다.

한국일본교육학연구(제14권 제2호)

<표 1> 9개 그룹의 특징에 대한 해석

그룹	일러스트	내용
제1그룹		· 예절, 도덕규범을 존중하면서 자신의 행편을 우선하는 사람으로, 다소 남학생이 많다.
제2그룹		· 예절, 도덕규범을 일탈하면서 자신보다 친구의 행편을 우선하는 사람으로, 여학생이 많다.
제3그룹		· 예절, 도덕규범을 지키지 않고 자신의 행편을 우선하는 사람으로, 다소 남성이 많고 가장 적은 96명이 속해 있다.
제4그룹		· 2개축의 교집합이며, 중·남학생 84명, 중·여학생 94명, 고·남학생 58명, 고·여학생 85명, 13.6%
제5그룹		· 예절, 도덕규범을 존중하고, 중학교 남학생이 많다.
제6그룹		· 예절, 도덕규범을 존중하고, 친구의 행편을 우선하는 사람으로 여학생이 많다.
제7그룹		· 예절, 도덕규범을 존중하는 사람도 있고 일탈하는 사람도 있으며, 친구의 행편을 우선하는데 고교생이 많다. 중·남학생 70명, 중·여학생 96명, 고·남학생 88명, 고·여학생 124명, 16.4%
제8그룹		· 예절, 도덕 규범을 일탈하는 행으로서 고교 남학생이 많다.
제9그룹		· 2개축의 교집, 중·남학생 45명, 중·여학생 56명, 고·남학생 57명, 고·여학생 62명, 9.6%

2. 상호이해를 막는 규범의식의 상위점

가. 한국 중·고생과 일본 중·고생의 2개축의 비교

축의 성격은 36개 설문에 주어진 특점 순위로 알 수 있다. 예를 들어 일본

중·고생의 I 축 경우를 소개하면, 독점 상위에 다음과 같은 설문이 나열된다(馬井政幸 他, 2003).

- 수업 중 친구가 말을 걸어 왔을 때 수업 중에 주의를 준다.
- 전철을 타고 있는데 휴대폰이 걸려 왔을 때 전화를 받지 않는다.
- 친구가 자전거를 두 사람이 타고 싶다고 말해 왔을 때 거부하다.
- 친구에게서 받은 노트가 물때 흔친 것임을 알았을 때 사용하지 않는다.
- 밤 늦게 친구로부터 만나고 싶다는 전화가 왔을 때 거절한다.

또한 독점 순위 하위에는 다음과 같은 설문도 나열된다.

- 전철에서 친구가 밀바닥에 앉았을 때 함께 밀바닥에 앉는다.
- 친구에게서 받은 노트가 물때 흔친 것이라는 사실을 알았을 때 사용한다.
- 막 산 참고서를 잃어버렸을 때 그만 포기하고 다시 산다.
- 전철에서 지켜서 앉아 있는데 노인이 다가왔을 때 자리를 양보하지 않는다.
- 전철을 타고 있는데 휴대폰이 걸려 왔을 때 전화를 받는다.

독점 순위 상위의 설문은 현재 일본의 사회규범을 기준으로 타당하다고 여겨지는 행위이며, 독점 순위 하위의 설문은 사회적으로 인정을 받지 않는 행위다. 따라서 I 축은 현재 일본사회 내에서 이미 존재하는 규범(상식)을 따른다(동조), 또는 따르지 않는다(일탈)로 구분되며, 이것을 '기관규범 동조 - 기관규범 일탈'의 축이라고 명명하였다. 한국 중·고생의 I 축 독점 순위 상위설문은 다음과 같다.

- 친구에게서 받은 볼펜(ball-pen)이 훔친 것이라고 알았을 때 절대로 사용하지 않는다.
- 수업 중 친구가 말을 걸어 왔을 때 "수업중이야"라고 주의한다.
- 영화관 매표소에서 친구가 세척기를 할 때 자신은 하지 않는다.
- 보충수업이나 학원수업을 멍멍이치자고 친구가 유혹을 했을 때 거절한다.
- 전철에 학교 갈 준비를 한다.

위의 설문들은 일본 중·고생의 조사에서 찾아낸 '기본 규범'에 대한 '동조를 한국 중·고생의 조사에 응용가능성을 보여주었다. 그러나 아래와 같은 독점 순위 하위설문에서 한국과 일본의 규범의식 구조가 다를 수 있었다.

- 길에서 근처의 사람을 보았을 때 인사를 하지 않은 적이 많다.
- 전철에서 지켜 않아 있는데 노인이 다가왔을 때 그대로 앉아 있다.
- 친구에게 자신의 단점을 지적되었을 때 '얘기해주지 않아도 잘 알아!' 라고 생각한다.
- 친구는 시험에서 100 점을 얻었고, 자신도 떨어지지 않았을 때 저버려서 분하다고 생각한다.
- 보충수업이나 학원수업을 멍멍이치자고 친구가 유혹할 때 함께 멍멍이를 친다.

축에 대한 영향도가 높은 '근처 사람에게 인사'이나 '친구로부터 단점 지적', '친구는 100점을 맞았다' 등은 일본에서는 사회규범이라고 할 만큼 강하지 않고 때와 경우 그리고 상대에 따라 변하는 가치관의 문제라고 간주된다. 또한 상위와 하위 설문, 어느 경우의 설문도 일본 중·고생의 I 축 상에서는 축의 성격에 영향을 주지 않는 위치에 있다. 이것은 한국 중·고생의 I 축을 '기관규범 일탈'의 척도로는 측정할 수 없다는 것을 나타내고 있다.

다음은 II 축의 경우이다. I 축과 같이 일본 시즈오카(静岡) 조사의 독점 순위 를 확인하면 상위설문은 다음과 같다.

- 친구가 왕따 당하고 있는 것을 알았을 때 편들지 않는다.
 - 길에서 근처의 사람을 보았을 때 인사하지 않는다.
 - 친구가 '자전거에 두 사람이 타고 싶다' 라고 했을 때 거부한다.
- 또한 독점 하위에는 다음과 같은 설문들이 오른다.

- 버려진 개를 찾았을 때 돌보아 준다.
- 전철에서 지켜 않아 있는데 노인이 뱃을 때 자리를 양보한다.
- 밤늦게 친구로부터 만나고 싶다는 전화가 걸려왔을 때 만나러 간다.

이상과 같이 II 축에 강한 영향을 주는 설문은 모두 사람이나 동물, 자신과의 관계에 대해서 선택을 묻는 것이다. 상위는 자신의 행편을 우선하는 것이고 하위는 관계를 가지는 것이 선택의 기준으로 간주할 수 있다. 그 때문에 '편견지향 - 자기지향'의 축이라고 명명했다. 한국의 경우 II 축의 독점 순위 상위설문은 다음과 같다.

한국 중·고생의 규범의식의 특징과 한·일 상호이해 교육의 과제

- 길에서 근처의 사람을 보았을 때 인사를 하지 않는 적이 많다.
- 전철에서 지쳐 앉아 있는 터에 노인이 बैठ을 때 그대로 앉아 있다.
- 밤늦게 친구로부터 만나고 싶다는 전화가 걸려왔을 때 거절한다.
- 친구가 오후 당파 당하고 있는 것을 알았을 때, 자신까지 괴롭힘을 당하는 것은 싫기 때문에, 친구와의 교제를 그만둔다.
- 친구는 시험에서 100 점을 받았고 자신은 떨어지지 않았을 때도 적버려서 부끄럽다고 생각한다.

특정 순위 하위에 해당하는 설문은 다음과 같다.

- 보충수업이나 학원의 수업을 '행맨이' 치러고 친구가 유혹할 때 함께 '행맨이'를 친다.
- 영화관의 매표소에서 친구가 새치기를 할 때 함께 새치기를 한다.
- 수업 중에 친구가 말을 걸어 왔을 때 함께 이야기를 한다.
- 친구에게서 받은 볼펜(ball-pen)이 훔친 것이라고 알았을 때 그대로 사용한다.

위의 두 설문들은 모두 사람과의 관계를 나타내고 있고, '근처의 사람, 인사하지 않는다', '노인, 앉아 있다'를 제외하면 모두 상대는 친구다. 한국과 일본 중·고생의 II축 해석키워드는 공통적으로 '관계'이다. 관계되는 상황에서 일본 중·고생에게는 '버려진 개'도 포함된다. 그러나 한국 중·고생의 경우는, '친구의 위치가 지극히 크다. 바꿔 말하면 '친구'에 한정된다. 이것은 II축에 대해서도 일본 중·고생의 '관계지향-자기지향'을 한국 중·고생에게 적용할 수 있음을 나타낸다. 이러한 관계를 보완하기 위해 중·고생시대를 가깝게 되돌아볼 수 있는 한국의 대학생·대학원생에게 앞서 말한 축 데이터와 해석방법을 제시한 뒤, 그들 그녀들이 경험과 지식에 근거해 해석하는 과정에 대해 정취조사를 행했다. 그 분석결과가 다음과 같은 축의 명칭의 변화다.

I축(기존규범 동조 - 일관(일본) ⇒ '예절, 도덕규범을 지킨다. - 지키지 않는다'(한국) II축) 자기 지향 - 다룬 사람 지향(일본) ⇒ '자신의 행편 우선 - 친구의 행편 우선'(한국)

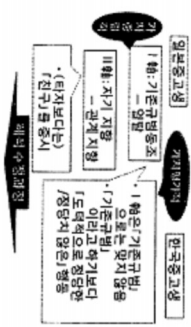
보다 중요한 것은 이 조사과정에서 한국 중·고생의 규범의식의 특성과 일본과의 상호이해의 벽을 시사하는 2가지 언어를 얻을 수 있었다. 그것은 '예절과 '우리'이다.

한국일본교육학연구(제14권 제2호)

나. '예절'과 '우리'로 보는 한·일 규범의식의 차이 구조

1) '예절'과 '우리'

한국 중·고생과 일본 중·고생의 설문에서 나타난 I축과 II축의 특징을 정리한 것이 [그림 3]이다. '일본 중·고생들은 규칙(기준 규범)을 따른다'(동조)가 최우선의 판단 축이다. 즉, 규칙의 내용이 아니고 '규칙을 지킨다'라고 하는 '규범(가치중립적)'이 일본 중·고생의 규범의식 중핵에 있다. 한편, 한국 중·고생의 경우 일본의 기준으로는 '도덕적으로 옳다-옳지 않다'라고 판단되는 설문 선택되고 있다. 일본에서 '도덕'은 모두가 지켜야 할 규범이 아니고, 개인적인 가치 판단에 따라 선택해야 할 기준이다. 그러나 한국 중·고생들에게는 '도덕'이 최우선해야 할 판단 축을 구성하는 위치에 있다. 이것은 한국사회에서 규범의식의 중핵에 누구나 인정하는 일정한 가치서열에 따른 행동양식이나 의사결정의 판단기준이 있다는 것을 시사하고 있다.



[그림 3] 한·일 중·고생의 중핵적 규범의식

이상과 같은 가설 하에 2회에 걸쳐 실시한 대학생과 대학원생의 토론과 정취 조사로부터 필자들이 중요하다고 판단되는 말을 정리한 것이 [그림 4]와 [그림 5]이다.



[그림 4] 2개의 축과 예절의 의미



[그림 5] 예절과 도덕규범

첫 번째 조사에서 ‘도덕’이 화제의 중심이 되고, 누구나 지켜야 할 사회적 행동으로 간주되고 있는 것을 확인했다. 또한 규범의식의 특징을 이해하는 동시에 서 가장 중요시 되는 언어는 ‘예절’임을 알 수 있었다(그림 4 참조). ‘예절’에 대한 의미는 연구조원으로 참여한 일본 대학원생 야마다치카(山田知佳)에 의해서 도출되었으며, 한국에서의 ‘도덕’ 또는 ‘예절’의 내용은 일본에서 사용되는 의미와는 다를 수 있다고 서술하였다(山田知佳, 2007). 이것은 규범의식을 내재화하는 사회화의 과정에서 가장 중요한 행위라고 간주할 수 있다. 또한 한국 중·고생과 일본 중·고생의 규범의식에서 상위권의 근원(roots)이 여기에 있다는 사실을 새울 수 있었다.

한국의 ‘예절’이란, 일본에서 말하는 ‘도덕’에 가까운 것이 아닐까라고 생각되었다. 그런데 한국대학생으로부터 「친구가 틀려도, 무리하게 바로잡는 것은 상대를 존중하지 않는 것이기 때문에 예절에 어긋난다.’라는 의견이 나왔다. 일본인의 입장에서 보면, 친구를 바로잡지 않는 것은 ‘나쁜 것’이다. 그 학생의 의견은 특이했다. 일본과 한국에서는 ‘좋다/옳다’로 여겨지는 것과 ‘나쁘다/옳지 않다’로 여겨지는 것은 서로 다른 것 같다. 그것은 그것을 결정하는 ‘기준’이 틀리기 때문이다. 「기준’을 나타내는 말도 일본과는 의미가 다를 지도 모른다.

‘예절’은 ‘양유유서’로 대표되는 것과 같이 대인관계에 관한 가치행거적인 사회적으로 합의된 덕목이다. ‘규칙’은 소속하는 조직이나 집단에서 공유되는 가

치중립적인 약속이다. 한국과 일본의 중·고생에게 있어서 ‘예절’과 ‘규칙’은 교사들이 잘 지켜라고 되풀이 하여 강조하고 있는 점에서는 같지만, 형성되는 규범의식의 내용은 크게 다르다. 일본에서는 소속하는 조직이나 집단의 규칙을 따르는 것이 요구되고, 한국에서는 직접 대면자에 대해 전통적 가치에 근거하는 행동이나 판단이 중시된다. 그러나 예절이 모든 도덕적 세계를 규정하는 것은 아니다. 예를 들어 21세기 한국 사회의 질서는 14세기에 시작되는 조선 시대에 연원을 거치는 덕목만으로 유지하는 것은 불가능하다. 대한민국의 법제도나 외국으로부터 유입된 관습 등이 수행하는 역할은 물론 것이다. 이러한 실마리를 풀기 위해 두 번째 조사를 실시하였다(그림 5 참조). 이 조사에서도 야마다는 한국과 일본 학생들의 규범(상식)이 다르다고 서술하였다(山田知佳, 2007).

일본인에 있어서 법률로 결정된 것이나 불은 절대적이어서 지켜지 않으면 안 되는 것의 최상위에 위치해 있다고 말할 수 있다. 구미 계국으로부터 일본으로 법률의 개념이 들어 온 것은 메이지(明治)이후이지만, 이유가 여하튼 ‘법·규칙’은 그 이후 천적하게 ‘지켜야 할 것’으로서 의식 되고 있다. 한국인에 있어서도 근대적 법률은 개항 이래 구미 계국에서 들어온 개념인 것은 일본과 같지만, 그 이전의 오랜 시간과 역사를 가져 온 ‘예절’은 ‘지켜야 할 것’으로서 천적하였다. 한국에서는 법률보다 ‘예절’이 규범으로서 상위에 존속한다고 할 수 것이다.

또한 한국 대학생은 ‘우리’를 중시하고 ‘우리’와 ‘예절’은 밀접한 관련이 있음을 언급하였다.

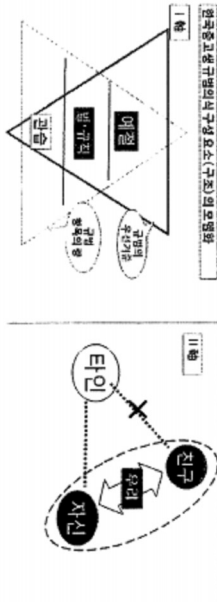
또, 한국 특유라고 할 수 있는 ‘우리’에 대해서도 의견이 나왔다. ‘우리’란, 부모와 자식, 형제, 친구, 상사와 부하, 선배와 후배 등, 일군을 아는 범위가 혹은 관계를 가리키고, 이 관계에 있는 사람을 대단히 소중한 약기는 사고양식이다. 반대로 말하면, ‘우리’ 이외의 인물을 배제하는 경향이 있어, ‘우리’와 ‘우리 이외’에 대한 태도는 정반대라고 말할 수 있다. / ‘우리’란 중시하는 한국에 있어서 개인의 생각을 혼자서 개별 행동을 하는 것은 대단히 싫어한다. 제1그룹이나 제3그룹의 인물이 개인주의로 보이기 때문에 싫어하는 것은 ‘우리’로부터 이탈되기 때문이라고도 말할 수 있다. ‘우리’와 ‘예절’은 밀접하게 관계해 있는 것으로 추측된다.

이상과 같이 한국 중·고생이나 대학·대학원생의 말, 일본 대학원생의 기록과 해석으로 나타난 한국 중·고생의 규범의식에서 상위점은 ‘예절’과 ‘우리’임을 알 수 있었다. 여기에서 소개한 야마다(山田)의 기록과 해석은 전문연구자 입장에서 보면 다소 깊이가 얕고 잘못 이해한 부분이 있을 지도 모르나 여기에서 중요한 것은 사상사나 철학상의 문제가 아님을 밝혀둔다. 그리고 이러한 관점으로

한국 중·고생의 규범의식의 특징과 한·일 상호이해 교육의 과제

부터 얻은 결론에 근거하여 한국과 일본 중·고생의 규범의식에서 상위점을 나타낸 2개축의 모델도(圖)를 작성했다(그림 6과 [그림 7] 참조). 우선 한국 중·고생으로부터 추출한 I 축을 규정하는 규범의식은 '전통적인 예절', '원래적인 법이나 규칙', '관습으로서의 규범'의 순으로 나타났다.

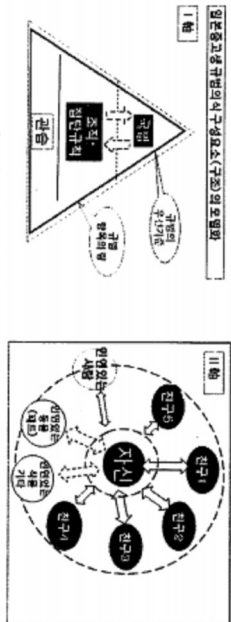
그러나 명문화되는 법과 달리 가정이나 학교에서 사회화에 의해 형성되는 '예절은 사회변화의 영향을 받기 쉽다. 또 '예절'은 대인관계의 틀이기 때문에 개별적인 인간관계에 좌우되기 쉽다. 여기에 II 축에 보이는 '우리가 갖는 범위의 폭음이 점차적으로써 보편적인 법보다는 가족, 친구, 자체 등의 개별적인 것이나 이해가 우선되는 인치사회(人治社會)의 부정적(-) 면에 연결되는 위험성이 있다. 혹은 '예절'을 다하는 대상이 정치가나 지식인일 경우, '우리의 배제 구조에 의해 정당화됨으로써 '우리의 밖에 있는 다른 정치가나 지식인과의 대립이 필요 이상으로 강조되어 타협할 수 없게 되는 위험성도 있다.



[그림 6] 한국 중·고생의 규범의식구조

[그림 7]에 나타난 일본의 경우를 살펴보면, 우선 일본 중·고생들은 규칙을 지키는 것이 중요하기 때문에 나라의 법이 강하는 순서로 I 축은 형성된다. 그러나 일상의 행동은 소속하는 조직·집단의 규칙을 따른다. 나라의 법은 신변에서 멀기 때문에 일상의 판단에 활용하는 지식의 폐기기에 직면되기 어렵다. 그 결과 '규칙을 지킨다'라고 하는 규범의식의 안에 소속하는 조직이나 집단의 이해를 법률보다도 우선시키는 선택사항이 갖추어진다.

한국일본교육학연구(제14권 제2호)



[그림 7] 일본 중·고생의 규범의식구조

또한 II 축에 보이는 동심원적인 인간관계는 대립을 막는 기능을 가지지만, 그 고리로부터 제외되는 것에 대한 필요이상의 불안감을 조성하는 온상이 된다. 그 결과 소속 집단에 대한 충성의 강요 등이 문제시 되는 배경이 된다. 물론 이러한 내용들이 한국과 일본의 모든 중·고생에게 생기는 일은 아니다. 그러나 여기에서 확인할 수 있었던 규범의식의 원형으로, 이것의 문제는 상호이해 교육의 과제이다. 상기 분석의 타당성은 'III' 표인과 연구자 대상의 조사 결과 타당성 판단을 위한 청취 조사'로부터 중요하다고 판단한 관점을 소개하는 것으로 해결의 단서를 제시하고자 한다.

다. 한일·일한 상호이해 교육의 새로운 과제와 해결 방향

심층조사에서 나타난 한국과 일본 중·고생의 규범의식의 타당성을 확인하기 위해 국회의원, 출판사 사장 등을 대상으로 실시된 청취조사는 장시간에 미치고 내용도 다방면에 걸쳐지만, 그 과정에서 다음과 같은 한일·일한 상호이해를 막는 몇가지 요인이 있음을 알 수 있었다.

1) '한국의 일본 이해와 일본 비판, 일본의 한국 이해와 한국 비판의 틀을 결정하는 체요일인 먼저, 한·일 교류의 핵심인물이 될 수 있는 국회의원은 일본의 전후 경제발전이나 문화교류에서의 다양성은 인정해야 한다고 이야기한다. 그러나 과거 역사의 해석에 대해서는 일본측이 제시하는 다양한 해석을 받아들이는 것은 곤란하다는 점도 강조했다. 일본에서의 생활이 길고, 정치가가 되기 전부터 한·일관계의 호전을 위해서 진력해 온 지식인이다. 때문에 그 발언의 의미는 무겁다. 그

러나 최근 한국에서 역사해석의 문제는, 일본과의 관계면으로는 풀리기 어렵다. 중국과의 관계도 문제시된다. 원래, 국경을 맞대는 대국과 대립경의 심각도는 일본과의 관계와는 비교가 안 될 만큼 깊을 것이다. 한국 내에서는 논쟁도 심각하다. 적어도, 한·일쟁방의 정치적 리더나 지식층의 내에서는, 첫째 서로의 입장을 상대화하는 시정, 둘째 일방적인 비난이 낳는 불모한 대립을 배제하고자 하는 의지 등 이 2가지가 뿌리내리는 것을 기대한다. 그러한 준비 작업으로서 10년동안 해온 실증연구의 의의가 인정될 수 있을 것이다. 또한 한국과 일본 쟁방에 있어서 뿐만 아니라 한국과 중국의 시각차, 그리고 한국내의 대립을 해결하기 위해서도 상호 이해와 비판의 실증연구는 시사하는 바가 있을 것이다.

2) 월한(嫌韓)감정과 혐일(嫌日)감정의 불합리성

최근 일본에서는 월한(嫌韓)을 새일즈 포인트로 하는 만화가 출판되었다. 거기에 대항해서 한국에서도 혐일(嫌日)을 기치로 하는 반론 만화가 출판되었다. 한국측과 일본측을 막론하고, 상대를 비난하기 위해 과거를 이용하는 것은 그 자체가 불행한 일이다. 역사상의 사건은 단순한 사실이 아니다. 사실로서 다루는 단계부터 이야기하는 축의 평가가 들어간다. 역사적 사실이 있음은 인정하 미는 관계된 사람의 수만큼 있다. "서로의 판단 기준에서 차이가 있음은 인정하지 않는 비판은 이해를 막는 벽을 높게 할 뿐이다." 한국에서 가장 좋은 일본 만화 만화의 편집자이며, 한국 만화를 일본 만화잡지에 인제시킨 출판사 사장의 말이다.

여기에서도 물어야 할 것은 역사적 사실의 인정과 평가의 전제로 있는 '역사들 이야기하는 자'의 입장이다. 그러나 그것이 입장과 이해를 의도적으로 결부시키는 이데올로기 비판의 수준에 머물면 새로운 대립을 낳을 뿐이다. 의도하지 않는 형태로 가미되는 '오해'의 구조를 실증적으로 밝히는 것이 아니면, 다양성을 서로 인정하는 합리성에 근거한 상호이해가 되기 어렵다.

IV. 논의 및 결론

역설적이지만 다른 문화간의 상호이해는 상대와의 유사성보다도 이질성을 아는 것으로부터 시작된다. 같지 않고 다르기 때문에 서로의 차이를 공개하는 작업과 그것을 같은 논의 높이로 서로 인정하는 노력이 중요해진다. 특히 유사성과 이질성이 복잡하게 서로 얽히고 있는 한국과 일본의 상호이해에 있어서는 이러한 작업과 노력이 더 필요하다. 그 중요성을 이해하는 일로서서 본 연구로

부터 '한·일 오해 구조의 일단'을 지적하고자 한다.

일본

- ① 사람이 지적야 할 장주의 사= '세월' VS. 관습형식으로서의 '세의'
- ② 궁정의 판단 기준으로서의 '도덕' VS 개인적 문제로 해석되는 '도덕'
- ③ '자신'보다 '법'과의 우선 관계 VS '자기'와 '다른 사람'과의 동거의 관계

위에서 정리한 것 같이 한국과 일본 사이에는 규범의식을 규정하는 기준과 평가의 행방에 있어서 오해를 낳는 구조가 분명히 있다. 한국은 '법'이나 '관습'보다도 '세월'을 중시한다. '자신'을 희생시켜서라도 '친구'를 위해 주는 것을 우선한다. 그러나 일본은 '세월'은 형식으로 치부되고, '법'의 준수를 중시한다. '법'을 무시한 특별취급은 '친구'에게도 폐를 끼치기 때문에 다른 사람들과 같이 대접하는 것이 옳다고 판단한다. 만약에 한국의 정치적 리더가 한국의 기준에 의해 일본의 정치적 리더에게 '일본의 기준에 의해 행동을 기대하면 어떻게 될 것인가?' 반대로, 일본의 정치적 리더가 일본의 기준에 의해 한국의 정치적 리더에게 '친구'라는 행동을 기대하면 어떻게 될 것인가? 지금까지 양국의 다양한 분야에서 정이 담긴 특별 배려를 요구하는 한국과 법에 따르는 조건으로 밖에 응하지 않는 일본과의 사이에서 예기치 않은 대립(오해)이 생기지 않았는가?

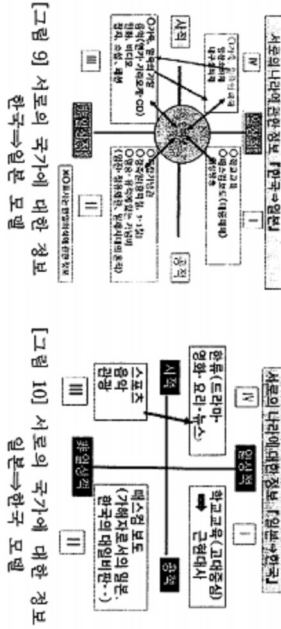
이에 대한 답은 본 논문을 읽는 독자가 풀 수 있을 것으로 기대한다. 본 연구에서는 일본비판과 한국비판의 '판단기준의 차이'를 드러내는, 즉 한·일 상호 유사성과 이질성에 관한 정보제공과 양국의 '이해를 위한 교육 프로그램 개발의 모델' 3가지를 제시하는 것으로 정리하고자 한다.

하나는 야마다(山田)가 그린 [그림 8]의 '한·일 상호오해 모델'이다. 책들은 '책'뿐만 아니라 지는 것은 서로 알고 있지만, '서' 있는 책들만이 다르다'는 것은 아직 알아차리지 못했다'고 하는 내용이다. 또 하나는 우마이(馬尾)가 작성한 [그림 9]의 '서로의 국가에 대한 정보'이다. '일상적-비일상적'과 '공적-사적'의 축을 교차시켜 4개의 면을 이용하여, 한국과 일본 각각에서 서로의 나라에 관한 정보를 정리한 모델이다. 양국의 비교로부터 서로의 나라에 관한 정보가 어떻게 위치 지워지고 있는가를 파악하고, 나아가 모든 정보를 일상화하는 한국에서 인터넷이 수행하고 있는 기능의 과제를 고려하는 모델로서 활용되기를 기대한다(馬尾政幸·李明熙等, 2006).

한국 중·고생의 구별의식의 특징과 한·일 상호이해 교육의 과제



[그림 8] 한·일 상호이해 모델



[그림 9] 서로의 국가에 대한 정보 한국⇒일본 모델

[그림 10] 서로의 국가에 대한 정보 일본⇒한국 모델

마지막으로 본 연구에서 의도하는 교육프로그램은 상기의 특징 확인과 교찰을 비롯하여, 이 3가지 모델도의 의미를 읽어내는 일부의 시각을 넓혀준다.

한국일본교육학연구(제14권 제2호)

참고 문헌

김윤정·장세철 (2008). 한국 대학생과 일본 대학생의 부모 부양의식 비교. 일본 문화학보, 39, pp. 211~229.

양정미 (2009). 한·일 고교생의 사회적 약속에 대한 의식 비교: 문화간 커뮤니케이션의 비언어적 요소를 중심으로. 석사학위논문, 전남대학교.

오고시나오키 (2006). 상대방 소유물 사용시의 무인행위에 대해서: 괴행위자측의 의식. 한·일 청년 조사 결과로부터. 한국어 교육, 17(2), pp. 183~198.

우마이 마사유키 (2001). 한국은 금후 일본문화를 어떻게 받아들일 것인가: 한국 청소년의 일본 대중문화 접촉 상황을 통해 보는 수용논의의 문제성과 과제. 일본문화연구, 4, pp. 62~82.

차원경 (2004). 배려행동을 통해 본 한·일 언어의식 비교. 일본어교육연구, 7, pp. 75~91.

카마타 사토시 (2008). 한·일 상호 이해를 위한 역사교육연구의 새로운 경향: 한·일 역사교과서를 대상으로 한 설문조사 결과를 중심으로. 역사교육연구, 7, pp. 187~213.

‘한·일, 연대21’·한국국제교류재단 (2005). 한·일, 상호이해를 기로하는 요인들: 그 정치적 무의식의 구조. 서울: 한·일, 연대21.

馬居政幸・李明熙その他 (2005). 韓国における日本大衆文化の調査研究 (9): 日本文化開放後における中高生の日本批判の特徴. 静岡大學教育學部研究報(人文・社會學科學篇), 56.

馬居政幸 (2005). 日韓相互理解教育の新たな課題: 韓国青少年への継続調査を手がかりに. 谷川彰英編『日韓交流授業と社會科教育』(pp. 285~290). 東京: 明石書店.

馬居政幸 他 (2003). 青少年に関する調査研究. 静岡大學教育學部研究報(教科教育學篇), 34.

山田知佳 (2007). 韓国青少年の規範意識に関する実証的研究: 中高大学生を対象とした量的・質的調査を通して. 静岡大學大学院教育學研究科修士論文.

抄 録

韓國中高中生の規範意識の特徴と
韓・日相互理解教育の課題

馬居政幸・李明熙
(靜岡大學校・公州大學校)

本研究は、韓國中高中生の規範意識と日本中高中生に現れる規範意識の特徴とを比較することによって、韓日兩國の相互理解教育のための、新しい方向を提示しようとする。このために、韓國中高中生2,905名を対象としたアンケート調査を実施して、多変量解析技法(対応一致分析)を活用、2種類の軸(I軸とII軸)と傾向が類似な9つのグループを区分して、規範意識の構造を把握した。また、韓國中高中生の規範意識についての調査結果を導き出すことにおいて、解釈モデルが日本中高中生と同一視するという偏見を最小化するために、次のような三つの階層を対象とした深層調査(集団討論及び聴取調査)を実施した。このようなプロセスを通じて、規範意識についての結果を再解釈することができた。

深層調査は、i)韓國中高中生を対象とした9つの典型的なグループを再解釈するために、ii)韓國大學・大学院生を対象とした2つの軸について再解釈するために、iii)教員と研究者を対象として、i)とii)についての妥当性を検討するために施行された。i)の調査と分析を通じて、各9つのグループに関連する特徴を、顯イラストで表現して、再解釈することができた。韓國と日本の相互理解を防ぐ規範意識は、ii)の調査と分析を通じて提示された。相互の間、最も大きい概念の差を現わす言葉は、「礼儀と我々(우리)」とあらわれた。最後のiii)の調査と分析では、韓日兩國間の、根が深い悪感情は、互いに違う文化から始った誤解の構造であることを発見した。そして、これを克服するためには、文化の類似性と異質性に関する情報提供と相互理解のための教育が必要であると提案した。

主題語：規範意識, 相互理解教育, 多変量解析, 対応一致分析, 深層調査